

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Diary of Hisakatsu Hijikata (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001075

土方久功日記 第2冊

1922年10月6日～1923年4月8日（大正11・12年）

解 説

この第2冊では、注目すべきこととして、久功が笹塚にいた時に作られた共同体「武蔵野草房」が10月8日に解散され、中井惣之助等が新たな共同体生活を続けるが、他の人々は別々の生活を送る事となったことが記されている。しかし、その後も、久功は度々笹塚を訪れ、山口昇を中心とした笹塚の人々との交流は続いていた。時々、テニスをしに出かけたり、雪が降ったときには一緒にスキーをしたこともあった。

10月下旬から、土方与志のヨーロッパ留学記念の公演準備のため、久功は再び模型舞台研究所に泊りがけで仕事をするようになった。27日には模型舞台研究所のメンバーで送別会を開き、11月2日に、模型舞台研究所で公演（俊寛）が行われた。4日夕方、与志は、ヨーロッパへ発つため、神戸へ向った。東京駅での見送りは盛大であった。

この慌しいとき、10月29日には、東京美術学校彫刻科学生の旅行で、那須塩原へ行った。夜行列車1泊を含む2泊3日の旅行であったが、列車の中で酒を飲んで裸踊りをするなど、当時の美術学校の学生達の行状が描かれていて、興味深い。

12月10日、母親から鹿児島の小倉家への養子のお話を聞かされる。母親はたいへん乗り気で、久功も少し心を動かされる。久功の置かれた状況と葛藤が描かれ、興味深い。しかし、その後の経過は不明であるが、結局のところ、従妹の柴山綾子が跡を継ぐことになった。

1923年2月3日、日記にはじめて母と兄との不仲が記される。「また――母と兄との間の黙闘が煽り立ちかかる。兄は一日留守にして晩に帰ると、自分の室に来て、色々なことを質問し訴へ、語る。何故こんなことが起るのか。性格の相違は何うすることも出来ない。唯にうちもさっちなり得ない、感情其物に対する理解と同情が、余りに貧弱だからである。而して、黙闘程人を自他互に苦しめるものはない。」

〔表紙〕
[2] 千九百二十二年十月六日ヨリ 千九百二十三年四月八日迄
大正 11-12 1922 功]

〔表紙裏〕
[今は亡き 懐かしき 父上に 功]

〔見返し〕
[×を附したるものは、別に 原稿紙に書き直したもの]

十月

六日

母は帰らない、兄は帰らない、弟は早く学校に出た。

暗い朝である。日は重い雲に妨げられ、寒くだまりこくった朝である。戸も開けず、中二階の薄暗がりに電燈をつけて、机の前に座って居る。朝食のチーズの匂が鼻につく。「希臘思想の研究」を読みつづける。「他の神々の間には悲しき痛ましき争ひ始まりたり。彼等の心はその胸の中にて様々の方に運らされたり。彼等は轟音を立て、打ち合ひたり。広き地は唸き、大なる喇叭は鳴り渡りたり。ゼウス、オリムパスに座しつつこれを聞きたり。而して神々の争を見たる時、彼の心は胸の内にて楽しげに笑ひたり。」(イリアッド第二十一卷)と。外には蟋蟀〔コオロギ〕の声が細るのに、ここには巨大なるゼウスが無邪気に高らかに笑って居る。秋の庭には柿の実が黄ばんで重さうに枝を撓め、無花果の葉にとまった露も落ちないのに、ここには神々の悲しい争ひに、広き地は唸くのである。

二三日前から引込んだ咽風邪がぬけないで、石の様に気を重くする。学校では仕事が出来ず、早く帰ったが、ぶら／＼して日が暮れると、雨が降り出し、風がざわ／＼と鳴り出す。退屈さうな弟と花札を引いて遊ぶ。(兄は出て行って帰らない)。悩ましい快い憂愁が、そっと心の奥に忍び込む。こんな日に、こんな荒れはてた庭の中の広い家に、弟と只二人居て花札を引くことが珍らしいのである。このまゝ、こうして居たら、中世の夢の中でも誘はれる様な気がする。人恋ひしい、何か心の奥に、静かに守るべき秘密が欲しい夜である。

コーヒーを飲んで、弟は奥の間に、自分は中二階に別れ／＼に床に就くと、頭がくら／＼と重い。

七日

終日じく／＼と降り続ける。そして時々非常な雨量と烈しさを以て、暫らくは地も〔掘〕堀れよ、石も凹めと打ち下す。夕方には轟々と雷をさへまじへて来る。併し間もなく気を失った様に、じと／＼と蔭鬱な姿に立ち戻る。風邪はしぶとく自分を悩ます。学校は休んで一日、中二階に立籠って居る。只一枚雨戸を開けて、薄暗い室にねころんだり、

机に向ったり、^{〔狭〕} 狭い室を歩きまはったりする。机に向っても、どれとまとまって本を読むのでもなく、ねころんでも、眠るのでもなく、歩きまはっても、考へるのでもない。朝から夜までかかって、自分のまはりに十冊近く、本だの字引だの取りちらかしたまでである。読めもしないので挿画ばかり見た「イリアッド」、国家思想篇に入って、急に興さめて読みしぶってしまった「希臘思想の研究」。赤線で興味深い所々にしるしして置いた——そのしるしを辿って、飛びへに読放した「日本古代文化」、退屈まぎれに、ふりがなを頼んで、ぼつりぼつり頁をかへした「古事記」曰く、「日本詩人」曰く、原稿用紙、又某々。

須佐之男命と云へば、生馬の皮を剥がれ、八岐大蛇を殺された方と知るが、古事記の須佐之男は「妣の国」恋しさに哭くお坊ちゃまである。併し道がしくしく隠れなきはなされず、めそへと一人泣きなされず、即ち「その泣き給ふ状は、青山を枯山如す、泣き枯らし、河海は悉々に泣き乾しき、是を以て、悪神の音なひ、狭蠅如す、皆沸き、萬物の妖ひ悉々に発」るのである。

イリアッド二十四巻には「ゼウスの床には悪しき賜物と祝福とを満せし二つの壺を並ぶ。その歓喜電光の中にあるゼウスに入り雑りたる運を与へられし人は、何人にまれ或時は悪しき、或る時は善き目をみん。されど悪しき方のもののみ与へられし人は、彼れに軽侮され、好き大地の上にも悪き饑餓に責められ、神にも尊ばれざる放浪者とならん」と。この二元論——根本善悪の対立は宿命的なものである。

古事記には、絶対善悪は認めない。即ち最もデリケートなる感情を透して、行為は善悪の彼岸に於て、好憎^{〔ママ〕}聖汚に分たれるのである。これは、最も人間的である。而して、感情が正しい時には実に理想的であって、ここに美しい同情倫理が生れる訳である。

八日 日曜

目が覚めると、外は風の唸りである。枝々の接衝、梢々の葉の凄まじい叩き合ひである。雨の重吹の吹き飛び衝きあたる音である。併し永くは続かない。狂暴な風が除々に行き過ぎると、再びじめへと秋雨が鉛の様な心を導くのである。併しこれとても永くは続かなかった。何時の間にか暗い灰色の雲は薄らんで来て、午には、おゝ青空、澄み渡った青空に、豊かな白雲が強く日に輝く。そして、あたりはわくへと喜びに震へて来る。自分は直ぐに外に出る。

街は蘇生の息を深く吐く。市ヶ谷見附¹¹³⁾の橋向ふのこんもり茂った古樹の群も、士官学校¹¹⁴⁾の白い建物も、濃蒼の空に爽やかに目新しいものである。笹塚に行く。山口さんに行く。宇多ちゃん¹¹⁵⁾が一人、風邪気で寝て居たが、自分が行くと、直ぐ起きて来た。暫らくして、子供へした洋服に着換へて散歩しやうとする所に、彦さんと君ちゃんが来たので、一緒に「芝生」に行く。

寝そべってキャラメルを含んで、恐れの目を瞞って美しい大空を仰ぎ見る。リオンは

喜んで馳け廻はる。自分等も「芝生」を果てから果てまで歩いて見る。もう其頃には白雲もない、何にもない、青い青い大空である。再び公園の方に歩かうとした時、昇さん¹¹⁶⁾と良さん¹¹⁷⁾が帰って来る。二人ともひどく腹をへらせて居る。散歩が止めになって、幾つか星が光るまで、家の前の芝原で横になる。食事の間に、深い水底に美しい銀粉を撒き散らして、月が光り出す。全く幾日かの後に空気を吸った気である（今日「武蔵野草房」は解散されて、室田サンは近々町に出るべく、良さんは暫らく山口さんの人となるべく、惣ちゃんがふみ止まって、牛屋サンの一人と新しい共同生活を^(始)初めることになる）水村サンでは、ひーちゃんがよくないので、明日医者^(始)の診断を請ひ、鎌倉に転地すべく、大田和の姉さん¹¹⁸⁾も腹膜炎を患って居る。シュクさんとひかるさんとを我が子の様にして、君ちゃんがすっかり老ひ込んで居る。

九日

すばらしい天気である。学校へ行ったが、仕事はしないで倉沢と笹塚へ行^(量世)った。キャンナルを歩き、代田橋の方を廻って守山公園に行き、公園で一時間余も腰を下して、山口さんの所でお茶をもらって帰った。

倉沢は下痢をしてひどく労れて居た。途々倉沢と色んなことを話した。倉沢は自分を敬って呉れる。併し倉沢と自分とは先達来うちとけた気持で話合ったのは、今日が只二度目である。倉沢は自分の片っぱししか知っては居ない。倉沢が自分に対して、斯くも信に信を措くとなれば、自分はこれでもかとあらゆる自分を彼の前にさらけ出さなければならぬ様な気がする。これは自分の為ではなく、彼自身の為にである。何故なら、倉沢はあまりに淋しい悲しい過去と現在とを持つ人間であり、自分は他人をまるで征服することを望まないからである。それ故に、自分は年上の彼があゝまで遜った心で自分に対して呉れるのを（或は自ら卑下するとさへ思はれるのを）、非常に有難くも思ひ、同情しながらも、自分は面とむかって「自身の存在を主張し、自身の人格を尊び、如何なる人の前にも必ず自身でふ誇を失はない様に」と、彼に繰返し云ふ。（自分はどうか、倉沢が正しく尊大であることを望むのである）。何故なら彼は精神的に、他人の前に正しく立つことさへ、他人をまともに見ることさへ出来なくなって居る程、それ程苛まれて来たからである。

倉沢は今日、自分に対して数多くの過去の悲痛を語って呉れた。併し、自分はここにはその内容に就いては記すまい。彼自身素直な心でそれをいたいたい、懐かしい過去として暗へ葬^(闇)り度い心であるから。

帰らうとする時、惣ちゃんに逢った。そして、暫らく立話して居た。

「解散したさうだね」

^(欄外に記す)

「惣」「うん、皆がいつちゃったんだ」

「良さんは高井戸の方に引込むさうだね。今日は朝から家をさがしに行ったさうだよ」

「養鶏をやるんだってさ、きっと失敗するだらうよ」

「何んだい、ひどく不機嫌さうだね」

「うん、だって折角帰って来たら一緒にならうと思ってたんだもの」

× × ×

〔欄外に記す〕

〔惣〕「ちっとも来なかったね」

「あゝ、ほんとに永いこと来なかったね。だが昨日も来たんだよ」

「うん、さうだってね。僕はちっともあっちの家には行ってやらないんだ」

「何故だい」

「来て呉れない方がいいって云ふんだもの。あんまり刺戟されたくないんださうだ。」

まだへ話した。惣ちゃんも寂しさうだ。若さと一徹さが導くので、黙って気の毒に思ふばかりである。

十日

帝展¹¹⁹⁾彫刻鑑査発表。「高原¹²⁰⁾」「東台¹²¹⁾」の紛擾は見るに堪えず、聞くに忍びない。憤ほろしく、はがゆい以上に浅ましく馬鹿馬鹿しい。学校のかへり、江波の処へ行く。晩には木山も来て十時頃まで話しなどして居た。遅く帰る頃には月が出て、冷えへして居た。

菅原教造氏の講義^{〔義〕}に出た。裸体の話の続きである。裸体承認の文化史的根跡^{〔根〕}として Caesar の話から出だす。Caesar は、古今を通じての所有方面に於ける大豪傑である。大戦士であり、大政事家であり、大詩人であり、即ち文武を兼ねたる両道に於ける大偉人である。其上尚有り余る勢力を男女両色につかひ分けた強の者であった。Caesar が凱^{〔旋〕}戦して帰る時発せられた警句は、「有所妻を持つものよ。気をつけるがいい」と云ふ意味のものである。或る伝記者は、

「Caesar は、所有妻の夫であり、所有夫の妻であった」と云って居る。

希臘に於ては、紀元前 780 頃、即ち league of nations が成立して、茲に Olympian games が始まった。Zeus (Jupiter) 領讃である。其後、前 720 の Olympiade 15. に Orsippoo が gown をかなぐり捨てて走ったのに始まって、競技者は全裸体で競走する様になる。希臘に於ては、private とか individual とか云ふものは全然認められなかった。そこで、競技の優勝者に与へられた彫像は、たとへそこには優勝者の名前が堂々と彫まれたとは云へ、当の競技者の像は已に其以前に於て彫刻せられたる「競技者の典型」に外ならない。希臘に於ては、男女の独身生活を絶対に禁じられた。何故なら箇は全に対しては全く力ないものであり、人民は国家においては何等の個人的意義をも許されない。而して、善き子を生むことは此上ない奉公である。

〔ここから十一月三日の途中まで、十頁横書き〕

此の故に、希臘に於ては、結婚は法便^{〔方〕}となり、人々は生産機器としてのみ認められた。斯くして、恋愛は極度に虐げられた訳である。而して、ここに恋愛を目的とする、丁度我国の徳川時の太夫にも相当するものが生れる。即ち Solon が始めたもので、其等の婦人は四つの等級に別たれる。Hetaere, Auletrioles, Coucubieus, Dictieriades であって、Hetaere は純然たる「太夫」型のもので、これには非常な教養が必要であつた。即ち哲学、文学、政治、芸術に^{〔互〕}亘^{〔修〕}って所有知識を脩得しなければならない。而して又、事実 Hetaere の中には、実に絶大なる勢力を以て、哲学に、政治に、芸術に、社会に影響を与へたものがあつた。(Auletrioles ハ、吹奏者、Concubiues は字義通りの concubine であり、Dictieriades は謂はゆる女中妾であつて、家事一^{〔一切〕}齋にこき使はれながら、妾の役をもはたすものである。) Phryne の如きは、Hetaere としてのみならず、哲学に於て、社会、政治^{〔に脱カ〕}於てさへ、その勢力は偉大なものであつた。

Thebe ノ時には、Eleusis に Ceres の祭がある。復活の祭で、中世の Dionysos (Bacchus) を祭る May Pole の如きもので、同様に Eroticism に結びついたものである。Eleusinian mystery (密儀^{〔議〕}) ; 農神 Deueter の娘 Persejhone はシシリーの園に一人遊んで、地獄^{〔獄〕}の神 Pluto に誘拐される。Demeter の悲嘆は直接農人等に不作を齎すので、Zeus の力によってつれ戻される。——此の祭に Phryne が始めて裸体で参加する国会は、冒瀆の罪を以て Phryne を裁かうとした。Hyperides は Phryne とは大の「仲好」であつたから、其の政治的権力を以てまで極力弁護につとめたが、裁判官は自説を固執して聞き入れない。其処で最後に Hyperides は其場で Phrene を全裸となし、「これでもか」と短刀直入策をとつた。而して、美事に成功したのである。希臘の裁判官は、美に対しては決して現時の裁判官の如くかたくなではなかつた。「これならば決して神を犯すどころではない」。以来、Eleusinian には全裸の娘が行列に加はることが出来たのである。Neptune (Poseidon) の祭列にも Hetaere は Priestess として全裸で宮殿から波打際に静々と歩を進めたのである。Auletrides には Diogeves の寵を得た Lais があり、Concubines には、Quo Vadis に出て来る女奴がある。Dictieriades は Dictirion に集居して醜惡な肉を安価に売る。

Dictirion は即ち templeprostitution で、現時に伝えられた種々の Venes は此の temple の守神とも云ふべきである。“Venus Callypigoo” では、年に一度、男子禁制の集会を開いた。而して是れから有名なる年中行事 “Callypigian game” が生れることになる [Coriute]。斯くて希臘は男性より女性へ、typical より Individualistic へ、畏崇より卑親へと——。

14th

久頭さんに^{〔著〕}驕って貰って、帝劇のマチネーに行く。Kathleen Parlow の Violin concert である。始めから氣持がよかった。自分には Elman はもとより Piastro よりも

Ginbalist よりさへも、もっともっと親み深いものだった。ことに Achron の Hebrew Prayer と Brahms の Hungarian Dance とは、もう決して二度と聞かれないものの様に思はれる。Hungarian Dance は、何番か今迄に一度も自分の聞かないものだった。而して、今迄のどれよりも懐かしいものだった。始めの少しも Melody のない G 線が、熱情的な Accut に震えた時！

何れもこれもよいもののうち Vieux tempo の Concert No. 4 D-minor は、随分すてきだった。明後日の切符を久顕さんに買って貰って、堀端を歩いて帰った。中沢夫婦出京。

15th sunday

16th

毎日天気が好イノデ、何ヨリモ気持ガイイ。皆ガ皆出テ行ッテ、一日静カナ気持デ家ニ居ル。夕方松岡氏が来タノデ皆デ銀座に行く。皆ニ別レテ家ニ帰ルト、小石川カラ電話ダッタノデ、直グニ出カケル。伊藤熹朔、水谷仲吉ガ来テ居テ、直グニ酒ヲ飲マサレル。水谷ガ帰ッテカラモ、三時半頃マデモ話シテ居タ。朝八時半頃、湯地カラ電話ダッタノデ、十時ニ学校デ落ち合ッテ、帝展ヲ見ニ行ク。西画、彫刻ニハ愛想ヲツカス。胸ガムシャムシャシテ、湯地ト別レタ足デ江波ノ所ヘ行ク。江波の所デ知治サンカラ今日ノ Parlow ガ、マチネーデアルコトヲ聞イタ。楽シミニシテ居タノニ、切符モ買ッテアッタノニ、晩ダトバカリ思ッテ居タノニ、四時前ニ家ニ帰ル。

江波の処で、日日新聞は今度の帝展の洋画と彫刻とに^{〔賛〕}対しては、全然批評をしないことを言明したことを聞く。大いに讃成である。帝展に蟠る黒面ハ必ず近いうちに切って落されねばならない。

17th

新嘗祭ナノデ学校は休み。午後 Parlow を聞きに行く。Strauss の Sonata があつたが、Strauss のものは自分にはどれもこれも親しめない。大好きな Wieniawsky の Concert D-minor、殊に第一楽章ト第二楽章を大変いいと思ふ。今日は非常に技巧的のものが多かったので、此の前の方がよかったと思ふ。Brahmus は、又々はじめてのもので一番よかったが、此前の方が尚よかったと思ふ。

Schwbert の Ave Maria も、今迄聞いたものとは大分違って居たが、尚いい様に思へた。中沢夫婦、夕方帰鎌。

18th

とうとう冷たい風に雑って、冷たい雨がやって来た。二日前に植木屋が庭の手入に来た時、花壇に醜く残った草花をすっかり取りはらはせてしまったのが、今朝、更に落莫として、只一本残した芙蓉は白く色褪せ、虫食んだ無花果、すっかり葉を落して骸の様

な木瓜の枝間に透いて、垣根の本に冷たい茶の木の青が黒ずんでゐる。寒い北風は一日中、小粒な雨を縁側に吹き入れた。一日中家の中に閉じこもって居て、何一つ出来ない。

19th

静かな朝が明けて、頭は軽々として居たが、間もなく意地悪い雲が出て来て、一日再び不快な気が満ちて居た。

一週間此の方、不快な憂鬱がやって来た。まとまった事は何一つ出来なくなった。只々何物でもいい、何物かの爆発を待つて居る心である。退屈な一本道を、万世橋から上野に日毎に歩いて行く時は、不甲斐ない程空虚な頭を以て、只只歩いて行く。その往復の四十分程、癪に障ることはない。其時、自分の存在と云ふものが、自分にすら如何にもとりとめのないものに思はれる。晴爽な日が来なければならない。悪魔のそれでも、女鬼のそれでもかまはない。自己を認識することの出来る様な、力強い誘惑が現はれねばならない。久しく美しい幻を見ない、久しく日毎の単調と停滞に倦きて来た。

20th

Oct. 20th

朝の街 Hisakatu

21st

「キチ、キチ、キチ、キチ」時計が鳴る。

「お前の頭は混沌として居る」

「秋の日が何んなに悩ましくても

只一人離れた思であつても

はたの誰れ彼れが何んなに愉快さうでも

又悲しさうでも

次ぐ日次ぐ日が肌寒い北風を送らうと

樹々の緑を一枚一枚剥がさうとも



朝の街 (Oct, 20th, Hisakatu)

〔コオロギ〕

蟋蟀が哀れに鳴かうとも

毎朝毎朝見る夢が夢であったとて

昼日中真白な新月が見えたとして

満員電車で若い女や男の息が胸を焼かうと

朝食の紅茶やチーズが過ぎた昔を呼んだとて

男の心を憐れものに思ったとて

蠱惑の悪鬼が逃げたとて

美しい幻が消えたとして

望まない望が偲ばれやうと……」

「キチ、キチ、キチ、キチ」時計がなる

「お前の頭は混沌として居る」

〔×を附す〕

22nd sunday.

昼前、弟と歯医者に行った帰り、三丁目で青田¹²²⁾の増子サンに逢った。妹達を伴って大妻¹²³⁾のバザーに行ったさうで。

午後、弟とぶらっと外へ出た。東中野まで行き、ぶらぶら歩いて中野に行き、上原サンでお茶を飲んで、日暮に帰る。

郊外ノ畑中を往くと、今更に秋の深いのに驚ろく。稲は重たく稲穂を垂れ、なだらかな傾斜面は遠く霞んで居る。

秋の日をまともに受けて畑中を歩くと少し暑い位で、そこらに新らしく立った郊外住宅の瀟洒な洋館の庭には、テニスをするもの、田圃道には子供達の瓶を持ってイナゴを取るものなど、静かな秋の日が一層閑かに思はれる。帰る頃には、灰紫の霞が深く深く襲いて、家々から昇る煙は白く流れ、浅緑の空には糸の如な新月が低くかかって居た。

23rd 24th 25th

小石川で模型舞台¹²⁴⁾がはじまり、例によって毎晩三時四時迄仕事をしては、一二時間寝て、一寸学校に行って、晩には又小石川へ行く。学校では丁度モデルがなくて此の一週間休んで居たので、都合がよい。

26th

昨夜から続いて仕事をして居たが、夜が白々と明け渡る頃から、爽やかな風が吹き出して雲が飛び、七時半頃仕事を止めて腹を拵え、風呂を浴びて床につき、十一時前に起きた時には、昨日から降り出した雨も止んで、美しい蒼空からキラキラした秋の日が射

し出で、よい程に風も吹いて居た。

パンを食べて建畠先生^{〔大夢〕}の処へ行き、旅行の相談をして学校に行った。遅かったけれど安本¹²⁵⁾、杉浦¹²⁶⁾なども居たので、一通話しをして帰った。

27th

学校の帰り、建畠先生の処へ行って旅行の話しをしたが、先生は体が優れないので行かれまいとのことだった。晩には、模型舞台の連中が久敬^{〔土方与志〕}の為に送別会を開く。銀座の青柳で十一時過ぎまで飲み、カフェードラゴンに行ってカクテルを飲んで、一時前に家に帰る。

28th

晩、十一時の汽車で一行十名、上野を立つ。

29th

列車満員。西那須野まで立往生。^{〔達〕}小室が乗り合はせたので、車中皆酒を呑んで裸踊で、西那須野に三時六分着。電車で新塩原に四時半過ぎ着。暗道を往くうち、次第に夜が明けると、満山の紅葉。善き道を塩ノ湯に七時前着。入浴、朝飯後、皆日向に労れてねむる。晩には酒を呑んで、皆々大元気。三階で底ぬけ騒ぎに旅客を驚かす。十一時過ぎ就寝。

30th

弁当を案内人に背はせて滝廻り。咆哮、霹靂、雷霆、雄飛、仁三郎を見て、一時宿にかへる。一風呂あびて出発。四時三十分の電車で西那須野に向ふ。駅で晩飯に酒を扱み、^{〔汲〕}皆元気づいて六時四十八分の汽車で上野に帰る。車中は又々裸踊。十時四十分上野に着いた時は、足達¹²⁷⁾、海野¹²⁸⁾の二人死人の如し。足達を皆に託し、海野を自動車に乗せて家へかへる。

31st

晩、小石川へ呼ばれて行く。ひどく労れて居たので、仕事は手伝はず、梅さん^{〔土方梅子〕}と招待状を書き、赤電車で帰る。

11 月

1st

2nd

皆で建畠先生の処に御礼に行く。晩、小石川から呼び出されて、しぶしぶ十一時過ぎ

に行く。俊寛五幕を飾って夜を明かす。夕方から雨となる。厚い霞が下りて雨は上って居たので、朝そのまゝ寝ないで、九時半頃家へかへる。一寝入して一時に起き、風呂を浴びて四時には小石川に行って居た。招待の八時を大分遅れて出来上った時分には、もう四五十人のお客さんが来て居た。十二時頃には大概のお客さんも引上げて、友達会¹²⁹⁾時分からの人々だけが十五六人残ったので、夜を徹して皆でダンスをした。

3rd

割引電車で七時には家に帰った。中井さんが来て宿って居たが、兄と出て行っただので、十一時頃まで寝た。午から歯医者に行く。頭も体も連日の出鱈目にひどく労れて居る。小春の日はよく晴れて、四面は晴々と何の蟬りもない。併し、それは今自分には少しもそぐはないものである。ぶらぶらと四丁目の方に向はって、くだらない本屋の店を

〔ここから再び縦書になる〕

暇つぶしに丹念に目を通して、先日来一寸思ふふしがあったので、只一つ目にとまった「性的神の三千年」と云ふ本を買って来た。此の種のものには、何処までかの附会が供ふものであるが、此の附会は先づ許されねばならぬものであり、此れをハンディキャップとしても、此の書はなか／＼面白い本である。

夕方、湯地から電話かかって、七時に湯地がやって来た。八時から銀座に行き、バーで一寸洋酒を吞んで、鳥料理屋の泉に行く。湯地の従弟さんも呼びよせたが、遅く湯地がまいってしまったので、先へかへり、自分も暫らく居たが、何うしても駄目なので、自分だけ歩いて帰った。家に帰ったのはもう夜明前四時だった。

四日

久々で、十時までも寝た。午後、歯医者にも行き、夕方、久敬が立つので、東京駅まで見送りに行く。兄は、神戸まで一緒に行く。雑多な見送人で大変だった。晩は、関口氏も来て居たので、皆で台町食堂まで飯を食ひに行つて、又々夜は十一時を過ぎて帰った。連日の放縦な生活に、もう根も精も尽き果てた。天気はあくまでも善い。暫く静かな心で本でも読める日を……。

明日から、此の空気を一掃しなければならない。

五日 日曜日。

朝から空は冷たく曇って急に寒かった。

一日何もしないでゆっくり休んでと、床の中で思つて居ると、八時に中井さんから電話でテニスに誘はれる。自分だけなら明らかに断はったにちがひないが、弟が先達から一度つれて行って呉れとの事だったので、しぶ／＼承知し、弟と歯医者のかへりに、

十一時に笹塚に行く。

ローンのテニスコートもいいが、ローラーを散々ひかされて、ひどくまいった。小平さんの奥さんが赤ちゃんをつれて来て居た。兎も角、非常に勞れて、夜十一時に家に帰ったが、昨日までの鬱陶しさ、飽満の悲哀から脱することが出来た。

六日

体中が痛んでたまらなく勞れて居るが、気分は爽やかだったので、冷たい雲を怪しみながら学校に行った。

午後、天気は漸次に晴れて行く。

夕方久顯さんと、絶体實在と觀念實在とに就いて論ずる。而して結局一と一とを加へて二になることを、ストリンデルヒの所謂「自明の神秘」として受け入れられない者は、華嚴の瀧¹³⁰⁾に飛び込まねばならないことになる。

八日

朝早く、空は時雨れて静かな寒い雲から、愁ひげな雨粒が落ちたが、長くは続かずに晴れ上った。併し午頃には、又々煙る様に強く又弱く雨が降り出でて、あたりは蔭々と暗かった。夕方一時明るんで、雨は止んだ。

夜、柳宗悦氏の「朝鮮とその芸術」を読むはじめる。自分は兎角、今迄センチメンタルなものに或る反感に近いものを感じて居たが、柳氏のものには或種の真実味を覚えて、何か親しみさへ感ずることが出来る。

九日

今日、学校の連中が先達の旅行の際、自分一人に世話をかけた礼として、慰勞の意味で茶話会を開き度いとのことで、山下の三橋亭に招かれた。併し終ひは結局酒になり、昼から初めて七時半にやうやく帰った。行雄さんと英さんとが来て居たが、間もなく帰った。頭がくしゃ／＼するので、八時半には床に就いた。併し十一時半には目が覚めてしまった。宵から吹き出した風は少しも和らがず、雨さへ交って居た。ひどく喉が渴いて居る。別に寝むくもないので、二時過ぎまでも本を読んで居た。

十日

急に寒く風は和らいだが、冷雨が静かに降って居る。併し午に学校から帰る頃には、雨も何うにか止んで、西の空は浅縹に色づき、肉色の美しい雲が夕立の後の様に、紫がかった霞の中に漂って居た。二時には晩秋らしい薄陽、が顛った土に温かく射しかけた。

夕方、齒医者に行った間に、又一しきり雨が降ったが、帰る時は深い空に星がきら

へと光って居た。歯医者で後藤さんの節子さんにお逢した。

一週間程以前からしっきりなしに咳が出て、電車の中などではきまりが悪くさへなる。而して背中が妙に底痛みがする。肋膜でも出なければいいがと思ふ。

十一日

静かに爽やかな日ではあったが、咳が止まず背中には益々痛むので苦しい。昨夜、文子さんから誘はれたので、午後は音楽学校の演奏会に行った。久顕さんも一時には学校に来て居た。曲目が大したものではなかった上に、今日は又何うした日か、演奏者等はまるでひどかった。其上、一つの演奏の間も、苦しい咳を堪えて居るのがたまらなく辛かったので、途中で帰らうかとさへ思ったが、そんなことを思ひへ、終りまで、兎も角聞いて居た。晩遅く兄が帰って来た。

十二日 日曜

静かないいい日曜日だった。朝から久顕さんと笹塚へ行って、日暮までテニスをして、八時過ぎに帰った。咳も大分少なくなったし、背中の中の痛みも楽になった。

十三日

晩八時半頃床に就いてしまったら、九時過ぎになって電気を消してしまった処に、中井さんがやって来たので、起きてしまった。十一時前に兄が外から帰って来た。中井さんは兄が帰って来たら、何処かへビールを飲みに行かうと云って、兄と十一時過ぎに出て行った。自分は風邪をひいて居るからと云って、断って床に入ったが、なかへ寝られなかった。そのうちに、一時には中井さんが帰って来た。中井さんが酒を飲みに行かうなどと誘ふことは極稀だ。而して自分は直ぐに其の訳を知って居た。

果して二人並んで床に入ってから、中井さんは話し出した。自分の行き方一つで二人の人が死ぬこと、併し若しさうしなければ、自分が死なねばならないこと。而して自分は他人が死ぬのもいやなら、そうかと云って、自分が死ぬのもいやなこと。其故自分の恋を Christian love に方向転換すべく努めたいこと。併し自分（私）には、中井さんが其れに堪え得とは思へないし、思ひつめた一時の寂しみから出た考へかただとしか思へなかったで、他人も生かし、尚自分も活きる為に、他の或人を生かす様にしてはとまで云ったが、今の中井さんには、そんなことは思ひもよらないことであるのを知ったので、兎も角も考へが変わって行かないかぎり、一途に花を愛する様にと云って置いた。寝たのは二時半を過ぎて居たらう。

十四日

朝六時二十分に起こされた（昨日電報が来て、今朝七時に愛子叔母様が一人で上野に

着くと云ふので、迎へに行くことになって居た)。全然間に会はないのは解って居たが、兎も角も直ぐに着物をきかへて出かけた（中井さんも一緒に起きて家へ帰った）。勿論、愛子さんには逢へなかった。

家に帰って朝食をして居る間、母が細井さんに電話で聞いたら、細井さんの方に帰って居られた。十二時に叔母様^{〔はカ〕}に一人でやって来られた。相かはらずつまらない以上に退屈であり、腹立たしくさへあった。三時前に帰って行かれた。晩には、お玉様が来られる筈だったが、自分は勞れて居たので、六時半頃、夜具だけかぶってうとへして居るうちに、本当に寝込んでしまった。

十五日

寒いので、四時には目が覚めた。床をとって寝直すのも面倒だし、そのまゝ起きてしまつて本を読んで夜を明かしてしまった。

十六日

終日雨が降って、凍る様に寒かった。暗い灰色の空の下に、山茶花が薄桃色にぬれ、ひばの柔らかな葉末は寂しげに揺ぐ。

今日から兄島¹³¹⁾氏や木内¹³²⁾氏と、午後モデルを使って小さな全身像をはじめ。午の時間に木内氏と柔道をやって、湯に入った。^{〔柴山矢八〕}祖父様出京。

十七日

五年振りで昨日柔道をやったので、朝起きると足腰と云はず、肩から背中から、体中がメリ―と痛む。

此頃また日記に不忠実になってしまった事に気がつく。これは直ちに自分の生活にゆるみが来て居ることである。（少くとも意志からはなれて、勢に従って居ることである。）

午後仕事をする様になったので、家に帰る時はもう暗くなって居る。本も読まず何となく暇がなくなる様な気がする。併し此の生活の緩に対しては、これは暫らくよい刺激となるだろう¹³³⁾。

〔欄外に記す〕

〔十八日〕

朝から関東学生角力大会に行く。帰り木山^{〔豊四郎〕}と倉沢^{〔量世〕}が来た。晩三人で江波を訪ねたが、中島の所へ行ったとのことで、中島の所へ行く。清公も来て居た。中島は今度、巢鴨に家を持った。明日は wife が来るのださうな。]

〔ママ〕

十八日

自分は Construction と云ふ事について考へる。今日、自分は角力の応援に引張り出

されて、午後の仕事に行く事が出来なかった。而してこのことがどんなに心残りになったことだらう。自分は時々学校の仕事の外に、こうして小さなものを作って見る。而して其時自分はより自由な気持で仕事をする。心の自由である。より強い興味に引かれる。而して、今自分に面白味ではなく、より深い意味での interest を感ぜしめるものは面であり、線であり、蔭と光であり、より以上に Construction である。それは、肩甲骨と上膊骨と、鎖骨と上膊骨とのコンストラクションではない。解剖学的な乃至は智的なコンストラクションではない。それはそれ自身の為のコンストラクションである。或るポーズの下に於ける腕と肩とのそれである。其時、腕が持つ力と方向と、肩が持つ線、面又は其処に現はれる明暗が構成する調和の極致であり、美である。自分は学校の仕事の時、如何に知的約束の為に小さな（無意味な——或はより大切なものを殺す様な）凹凸を作り、機械的模写を強ひられて居るが、内在する美は作者によって見出され、創造せられ、表現されるのである。智的神通力によって見る血脈、筋肉乃至骨格ではない。この誤謬には、或る客体を通して芸術を生み出す場合に、多くの人が不知のうちに陥ってゆく。斯くして芸術が単なる再現に終わって行くのである。自分が用ゐる或る客体は、再現される為ではなく、それを透して主体が生み出される所的手段であり、材料である。

〔欄外に記す〕
[organic construction]

十九日 sunday

〔原〕
(源題から離れるかも知れないが、昨日の続きを考へる。)

では、全然客体を離れる場合は何うか？（現に彫刻に刻ては全然離れきったものを見ないが、絵画に於ては幾多、此種の作品に接して居る）象形美術に於ては、作品自身がある Figure を持つことになる。そしてこれは直ちに空間的自由に生きるもので、時間的進展をこれに求めるのは、象形美術の約束に悖ることになる。（現にこの種の企ては幾多の画家によって、或る種の成功を得られては居るが、これとても、よりこの企に適合したる、云ふならば其目的の為の時間芸術（抽象芸術）に於て為されたものからは甚だ遠いものである。）——（ここには或る限定を超した所に破約の興味と、それに供つた別固の面白味とがあるとは云へ、これは徹底的な企とはなり得ない）。

そこで客体は、時間的に極りなく推移する主体を、或る許されたる範囲に限定することになる。若し我々の頭の中に、或る詩が判然と構成されたる時、Figural なコンポジションが企図されたる場合、其時でも我々は客体を離れることが許されないか？

併し此の場合でさへも、象形芸術は必然視的経験乃至視的感觉衝動に左右される。其上シンプリファイすることは、印象乃至創造の精点を強調することに於て、あらゆる雑漠から救って呉れる唯一のものである。即ち例へば、群像彫刻に於て、それ等の個々が持つ説明的表象は、決して作品の一義ではあり得ないので、群像全然があらゆる意味で、一つの完全されたるコンストラクションでなければならないのである。即ち芸術は、言葉で云へる言葉ではなくて、言葉では云へない言葉である。——そこで言葉によって、

或は文字によって構成せらるべき詩の形式を取る場合には、作品はある言葉を透して、言葉では云はれない言葉を語らなければならない。即ち言葉の外に或る暗示なり、表象なりを含ませるのである。

弟は笹塚へ行くし、兄と母とは教会に行くし、朝のうち唯一人家に居て、久々に詩など読んで居た。落着いたいい日曜日だった。

現実苦しむものは、現実を否定する。現実満ち足りるものは、現実の永劫の持続を希ふ（現実の破滅を畏れる）。而してそこに夢が生れる。夢は現はれて芸術となる。

[illegible][illegible]

二十三日

直矢叔父様の結婚披露で、一日中人の出入や何かで、引掻きまはした様な騒ぎだった。午後四時からの筈だったので、二時頃久顕さんと家を出て、歩いて日比谷公園をぬけて、華族会館に行った。

帰りには最う十一時にもなって居たが、兄上と自動車を家の角でのり捨て、メトロポールへ行った。

二十四日

〔中沢〕

佑さんが夜十一時の汽車で帰国。

二十五日

一日家に居ないのではあるが、家へ帰っても、今日からはやっと落ち着て来た。

今日は、妙なものにぶつかった。それは、不思議な言葉である。レオナルド・ダ・ヴィンチと云ふ五百才程のお爺さんの言葉である。

お爺さんのお話の題は「絵画は其の精妙なる可能性の故に人間の総べての製作に優る」と云ふので、其中に絵画と詩との面白い比較がある。先づ絵画を無声の詩と呼び、詩を盲目の絵と呼んで、さて啞と盲といづれが痛ましい苦悩であるかを考へて見るがいい、と。一例としては、次ぎの事だけを挙げると、即ち、若しも善い画家が戦場の狂熱を写し、詩人も亦それを叙し、そして此の二つの描写が一緒に示さるゝならば、いづれが観者の大多数を惹きつけるか、直ぐに諸君に分るだらう。一層有益で一層美しい絵画の方が、一層大きな快感を与へるであらう事は疑ひない。又、どんな場所にでも御名を誌し、そして其の傍に神の御影を置いて見るがいい。何れが大なる尊崇の念を以て仰がれるか、諸君に分るだらう、と。

処ろで今二十三才になるかならない、若い者の考へ方はこうである。第二の場合に於て、若しも絶体の信仰を持つ人ならば、彼は其の御名に虔しく跪くであらうし、否一歩進んでは少しでも絶体なる神様か、或種の限定的に表はされた絵画の前には、より以上の尊崇を欠くであらう。又、若しも彼が其の絵画の前に跪まづいたとならば、彼は実に字義通り絵画の前に――絵画でふ芸術の前に跪いたのであって、神の前に跪いたのではない。そこで、若しもお爺さんの言葉が正しいとすれば、それは絵画を透してでなければ神を拝み得ない、「心の盲」共に対してのみである。

もしそれ第一の場合に於ては、お爺さんはあはれにも、空間と時間とを混然たらしめ（寧ろ時間を無視して居る）空間芸術と時間芸術との本質を忘れて居る。即ち詩に於て、譬へ叙景詩に於てさへ、そこに表はれた連続絵画的効果は詩の第一義ではなく、叙景画に於てさへも、そこに描かれたる説明的再現が、絵画の第一義ではあり得ないのである。

其上善き観照者は、其詩の中に其絵をも見るだらうし、其詩のうちに其の絵をも見るであらう。

而してお爺さんは、最後に「諸君は画家がブラッシで以て到達する処に、ペンで以て到達することは出来ないのである」と。そこで若者は「画家も亦（お爺さんも亦）同じ様に、偉い人達がペンで以て到達する処に、ブラッシで以て到達することは出来ないのである」とつけ加へる。

二十六日 sunday

朝から晩まで風もない静かな一日を、音もなく粉雪の様な雨が降り続けた。庭の数多い楓もどうだんも、千しほに染って悲しく濡れた。夕が近くと、雨だれの音も間遠になって、紫の霞が深くたれ込める。一日中何するともなく、家の中にちぢまって過した。夜に入って恐ろしい様に冷たい風が吹き荒んだ。雨戸のすきまから、縁の下から、何処からともなく寒むへと肌にしみる。明日は晴れた。

二十七日

天気は晴れへこして、十一月の終には珍らしい暖かな日である。

歯医者に行つて、遅く学校に行く。さて午後の新らしいモデルの新らしいポーズの楽しみは、午になって小島氏から断はつて来た。自分一人でもと云ふ氣になったが、モデルは皆帰つてしまつて居ない処へ、江波がひょっこりやつて来る。で、木山、三角と中島〔知彰〕の家に押かけて行く。夕方帰つて暫らくすると、中沢サンが国から土産物をしこたまもつて帰つて来る。中沢夫婦は、自分の心を幾日の間思ふ様にひっかきまはして、夜鎌倉にかへつて行く。

やうやく我が人数になつたと思ふと、何か取り残された様な氣がしないでもない。夜は月が明るく、再び寒い。

二十八日

黒ずんだ庭土に、一面に初霜が降つて柔らかい。朝の陽に寒むへと光つた。――午後のモデルは、先週のを続けようと思つたが、他に行つてしまったので、今週は止めて、来週から来て貰ふことにする。

今庭は、来る冬の前に最後の点滅の様に美しく飾られて居る。夕々に紫の霞の中に、早く葉を落した梅、桃李、百日紅の淡い灰色の間に、古い楓は幾本か紅葉し、榎、樅、榎は濃緑の塊を投げ、ひまへに八手の花は灰白い総を垂れる。茶山花〔ママ〕の哀れかな薄桃色の花は、咲いたまゝに寒さにふるえて居る。長い秋の雨毎に、青々苔むした土は黒く潤ひ、二羽の山鳩が日毎にここに訪れて、樹の蔭に餌をひらふ。鈴なりに赤々となり、充ちた渋柿をものがせてから、ひよはかしましい鳴声を潜めてしまった。

二十九日

二時の汽車で鎌倉へ行く。停車場から直ぐ斯波さんへ江波の妹を訪ねたが、留守だったので、昌生叔父様の処へ行く。久顕さんも来て居た。やがて兄も来た。夕方、昌生叔父達と皆で、佑さんの処へ行く。祖父様と愛子叔母様¹³⁴⁾も来て居られた。峽い家^[狭]へ十人のお客様で、賑かに晚餐をすませて、十一時過ぎ、自分は山¹³⁵⁾へ行行って寝る。

三十日

七時前に起きて、起きぬけに電車で浜へ出た。綺麗な朝だった。夏とはちがって小さな波が寂しく打って、人もない砂浜には、波の跡が消えずに居る。長谷の端に打ち上げられた混布^[昆]が高く香る。それでも暫らく歩いて居ると、切れたり続いたり、花車な草履の足跡などもある。藻屑の間を烏が二つ三つのそへ歩いて居たが、人が行くと遠くから直ぐに飛び立ってしまふ。まだ静かな町を歩いて大仏まで行く。門の中は綺麗に掃き清められて、右手の芝山には紅葉が美しく染んで居る。大仏は柔しい面持^[優]で自分を迎へる。遠くで一目に見るよりも、近づいて仰ぐ方がいい。仰ぎながら左へまはって行くと、向ふ側から澄んだ日がさしかけて、優しい顔に潤ひをさへ加へる。暫らく処をかへては眺めて、又元来た道を帰って来た。朝食後十時に出を出て、昌生叔父様の処へ行く途中母に逢って、一緒に佑さんの処へ行ったが、ぢきに自分は昌生叔父様の処へ行った。茅ヶ崎へ行く心算だと云ったら、叔父様も是非一緒に行くとして、二人で出かけた。汽車の中で、十何年振でツネサン¹³⁶⁾に逢った……。

茅ヶ崎で父上のお墓詣りをしてから、叔父様と別れて、お末叔母さんの処へ見舞に行った。照子は大変元気で、室の中をそっと歩いて居た。日が曇って雨でも来さうな様子なので、直ぐにお暇して、夕方鎌倉に帰った。叔父様は難波¹³⁷⁾さんの処へおよばれただったが、夜十一時頃になって、難波さん、黒岡さん、秋庭¹³⁸⁾さんを引張って帰って来られ、又一しきり飲み方がはじまった。一時過ぎに寝た。

暗くなった頃から雨がひどく降って来た。

・ ——— ・

✓・田道遠く草枯れの間の一つ石に名のみおはすも父は我が父は

✓・御墓に詣でまつりてはるべの冬田の道の日をぬくみつも

十二月

一日

夜の雨は霽れて、湿った土に枯れ残った小菊に暖かい日が射したが、空気は冷たかった。半日、南向の縁側で日向ぼっこをしながら、百合子と遊んで居たが、午後三時の汽車で東京に帰った。早く床に就いた。其後一しきり雨が降りはじめたが、直き止んだら

しい。

二日

学校のかへり、三沢と江波の処へ行った。夕方帰ったら間もなく、関口氏がやって来た。^{〔寛〕}其内に行雄さん、英さん、国さんがどや〜とやって来たが、間もなく帰り、関口氏も十時半頃帰って行った。外には寒い月が明るく照って、風がさら〜鳴って居る。

三日 sunday

半日、日の当る縁側に座ったまゝ、一寸立ち動くのもおっくうな程暖かく快よかった。併し、北風は寒く烈しかった。午後小城さんに行った。行く途で叔母さんと文ちゃんに逢った。二人は音楽会へ行く処だったので、其まゝ小城さんへ行った。兄が行って居た。午後半日、炬燵に入ったまゝ動かなかった。夕食後、兄と保ちゃんとは木島さんに行ったので、誰か帰るまで留守番に居なければならなかった。小さい子供達が皆寝てから、通子さんと二人で炬燵に入ってつくねんとして居たが、十時になっても誰も帰らないので、通子さんも其まゝ炬燵の中に自分の側に寝てしまった。退屈なので通子さんの英語の本を引張り出して読んで居た。十一時に通子さんが目を覚して自分の床に就いたら、保ちゃんが一足先に帰って来た。二十分程して叔母様達も帰って来た。家へ帰ったと思った兄も、一緒にのこ〜帰って来た。遅くなったので宿る。小城さんへ行く途々、冬の風が不遠慮に吹きまくって、乾いた道から黄色い埃が飛び、日だけが恵深く暖かい心に輝いた。

^{〔欄外に記す〕}

[technique が手段となって象徴となり、詩となる場合、technique が其自身として活躍する場合]

四日

晴れ〜と寒い。七時半に通子さんと一緒に出て、学校に行った。午後のモデルはうまくゆかなかったの^{〔木山豊四郎〕}で、今週だけ首をやることにして、豊公をたのんだ。暗くなって帰った頃、家の前の通りから真東に、霞んだ様な空に、低く大きな〜柿色の満月が光りなくたゆたって居た。中沢夫婦が昨日から来て居た。ひどく劳れて居る。

彫刻作家を二種に別ける。

モデルを用ゐると否とにかかはらず、心の詩を現はす場合。即ち題作であつて、楽曲^{〔喻〕}に論ふれば、情緒的な主題曲であつて、モデルが其自身目的となる場合。これは意味以上に技巧的なものであつて、楽曲に於ける形式楽的な観賞法を要求する。

五日

朝、若井さんに行く。節子さんに逢ふ。朝は、昨夜の雨が止んで明るくぬる―と暖かく、一面の灰色めいた美しい雲の切目に深い明るい蒼空が見えたが、若井さんから出る頃から、急に暗く雲の上に雲が重なって、霰が降り出した。烈しく降ったが、学校に行った時分には、もう一面の青空から日が照り渡って、冷たい風が吹きつけた。

四時半に上野の駅に待ち合はせる約束だったので、少し前に行って居たが、五時半にならうとしても来ず、随分寒い思ひをして、六時になっても来ないなら帰らうか、などと考へて居たら、^{〔中沢〕} 佑さんが、もうあやまりながら飛んできた。一緒に「麦とろ」に行ったら、家のものも皆来て居た。「松栄寿司」も行って、「あがったよ」に行って、動けなくなる程腹一杯食って、万世橋まで歩いて九時前帰って来た。

六日

佑さんは、佐世保に立った。^{〔柴山矢八〕} 祖父様出京。

夕方、^{〔山口〕} 昇さんと^{〔中井〕} 宇多ちゃんと良さんが、ひょっこりやって来た。八時半頃、寒かったけれども、日がいいので六丁目まで皆を送って行った。

七日

遅く学校から帰ると、愛子叔母様が来て居られて、又々静かに労れを休めることも出来ない。此の数日、家の中は旋風の様に、或は自分の心は激流の様に絶間ない動揺に劳れて居る。祖父様帰鎌。

八日

留守の間に愛子叔母様も鎌倉に帰られ、夕食後は落着いて自分の室に閉じこもった。

九日

運動部の納会に薦められて出たが、面白くないので、^{〔量世〕} 倉沢、三浦と「麦とろ」へ行って夕食を食べた。

円やかなるものは親しき

そは望みなければなり

刺あるものは更に親しき

そは自らはいとしければなり

〔×を附す〕

十日 sunday

今日は、笹塚に行く心算だったが、江波から電話で、午後、中島と来ると云ふので心まちに待つが、遅く三時になってやって来て、一時間半ほども居て帰った。一日結局何するともなくぶら〜暮してしまった。

晩、母上と英子と鎌倉に行く。

今日、母上から鹿児島の小倉家へ養子の話¹³⁹⁾があった。伯母様はもう八十才に近いし、別にやゝこしい親戚関係もなし、ほんの名籍養子ではあるが、さて面と向って話されると、考へずには居られない。勿論ほんの名籍だけではあるし、急いだ話しでもないが、母上は大分気が向いて居るらしい。と云ふのが、自分の為（私）ではあるが、月々百何十円かの定収があり、現金、土地等が一寸、三万余あるからである。併し自分としては——名籍が何うなろうと少しもかまはないし、今の自分に三万とまとまった金はかなりに有難いものではあるが——お鶴お婆さんのことも気になるし、其以上に、近い鹿児島親戚の人々の心もおしはかられるし、又多少の拘束も思はねばならないし、今の処、取捨半する様な状態である。勿論これは、祖父様唯一人の胸で、まだ何の直接なものはないのであり、万一の場合になったとて、東郷さんの伯父様方の種々お考へもあらうし、自分としては別段の予期もない。其上多くの人々の反対をしりぞけて美術学校に入った自分であれば、既に現在は何うであれ、何処までか一人でやって見度い意地もないではない。尤も父上のない後の今の自分は、既に一人ではないのではあるけれども。

十二日

^{〔土方玉子〕}
朝早くお玉さんがやって来る。

-
- ✓・幾たびか病むてふことを願ひしものち生くるに勞れし心
 - ✓・いつよりか詠みならはせる我が歌をありのすさびと人思ふらめや

十三日

齒医者にも夏から奉公したが、今日でやうやくおいとまになる。

学校のかへりに小石川に行く。兄が行って居た。夕食後、直ぐに帰った。兄はそのまゝメタクササンの処に行った。

十五日

朝から幾分しぐれて居たが、昼には糠の様な冷たい小雨が、音もなく降って居た。四

時に学校を帰る頃には雨は止んで居たが、一しほ寒さが加はった。帰り田辺さんに行つて、夜九時半頃までも子供達と投球盤をやつて遊んだ。田辺さんから帰る頃には、寒く澄み渡った空に、星が沢山に煌いて居た。

十六日

愈々今日で学校もをはる。後は、来週水曜午後の英語だけだ。今日は最後だったので、夕方帰りに皆で岡塾でしるこを食べて別れた。

- ✓・へだてつゝへだてられつつながらへばまだ若き身をわがうらみつつ
- ✓・女はも伴りながらしかすがに身に知らざるぞをのこにはつらき
- ✓・うつせみの心弱きを知りつなばなど契りせんあだし待ちせん
- ✓・誰をはも恨みんとにはあらなくに儚なかりけむ仇し契ぞも

十七日 sunday

午前中に一寸三沢の処へ行つて、午頃笹塚へ行く。テニスに出かけ様として居る処へ、惣ちゃんが後藤兄弟、野崎をひっぱつて来たので、皆で夕方までテニスをして、昇さんの処で賑やかに牛鍋をつつついて、九時頃家へかへつた。ひーちゃんも茅ヶ崎から帰つて来て居たが、蒼黒い顔は力なく、唇は乾き頬はポーッと赤くのぼせて、前よりも悪さうだった。彦さんが、「秀は直っちゃったよ」と繰返して云ふのが、何だか悲惨に思はれた。ひーちゃんは益々沈んで行く。

十八日

一日風もなく薄陽して静かな日だった。併し寒む寒むとして、何処となく人の心を引下げる様な日である。午後久々で野間の処へ見舞に行く。市ヶ谷へ行く途中、大きな白い西洋菊が美しく咲いて居るので、一鉢買つてもって行く。野間は喜んで呉れたが、長い間の病床に勞れて力なさそうだった。

- ✓・病み永み久にてあへる喜びを頬にうすら笑むあはれ友はも
- ✓・もてこし遅白菊を美しと見る患ふ友のまなざしかなしも
- ✓・伸びし髪を束ね結びたりあはれかも病みつかれたる友のこうべに
- ✓・久にして相見てこころ足らへども言はましことの口を嚙みて
- ✓・言はましきことの多くて黙ししもあまりにながく逢はずありけり
- ✓・言はまくも思ふこころの胸堰きて黙してあればさみしくもあるか

十九日

昨夜床に就いてから、兄が管野氏をつれて来た。管野氏は今朝十時過ぎに帰ったので、皆で星のカフェテリアに行って昼食をすまし、兄だけ別れて三越に行き、白木屋にも行って、靴だのネクタイだの揃へた。外へ出ると、道に暮らしく、沢山の人々は手に手に大きな包を抱へて忙しげに行き、店々は是等の人々の為に美しく飾られ、辻々には救世軍の女が黄色い声をはり上げて、慈善鍋に寄附をあふいで居る。

二十日

午後から英語の試験だったが、^{〔植二〕}後藤と約束して置いたので、十時半頃学校に行く。昼飯は、後藤と新妻氏と三人で上野の公衆食堂に行って食ふ。試験は相不変呑気なものだった。夕方帰ったら、英子サンが帰って来て居た。夕食後、久顕サンと銀座に行く。クリスマスのデコレーションも不景気なせいか、大して華やかではない。それでも、かなり賑はっては居るし、道に暮の様な気持がする。

銀座で村田のミノチャン¹⁴⁰⁾と喜多島のサーチャンに会った。一まはりして、パーラー¹⁴¹⁾でベルモットを飲み、後ブランタン¹⁴²⁾に行ってウイスキーとベルモットを飲んで、久々でいい気持になった。パーラーの三階も静かだったし、ブランタンもいつになく静かで気持がよかった。十時半過ぎに帰る。

二十一日

暖かな静かな日よりだった。朝のうち、ふと縁の下に沢山の球根が芽をふいて居るのを見出して、——これはこの春、兄がよそからもらって来たチューリップとヒアシンズと水仙だ——兄に何うにかしてやったらと進めてみたが、^{〔勸〕}一向に兄は興味が無いらしいので、貰ひうけて一々鉢に直してやった。もう時が大分ちがふけれど、一鉢でも咲いたら嬉しいだらうなどと思ふ。

午後、佑さんが佐世保から出て来たので、晩は皆で花などひいて遊んだ。

二十二日

皆でカフェテリアに昼食を食べに出かけた。四時には江波兄弟、中島、^{〔陶次郎〕}三浦、倉沢が来、日暮からオデンで酒を飲み出したら、関口さん、八木さん、保チャン、木山なども来て大変な賑ひだった。

二十三日

二日酔ひで一日頭が重かった。晩、関口さんが来て話して居る処へ、珍らしく用ヶ瀬さんがやって来て、十一時過ぎまで喋って居た。

二十四日

^{〔勇造〕}高が洋航^{〔行〕}するので、朝七時半に東京駅に送りに行く。伊藤熹朔に逢って、銀座まで歩いて別れて帰る。松元から電話が来て、^{〔泰彦〕}安場が来るから来いとの事だったので、午後二時頃、松元の処へ出かけたが、^{〔保国〕}安場は急に来られないとの事だった。明日入院するとか。

夕方、松元と一緒に外へ出る。品川駅の前で夕食をすませて、銀座に出た。色々な人に逢って、永いこと引張り廻された。十時前家に帰る。

二十五日

我が馬なる詩よ

暫らく何処に姿を潜めたのか

自分の馭者なる我れに

雑莫たる道をしるべする

我が心の馬なる詩よ

今我は再び新たなる革命の鐘を

我が耳の奥に聞く

明日の日の曠曠なることよ

さて静かなる思索よ

しぶとき心よ

明日の日の道の為に

我が馬を我が歌を呼び来れよ

〔×を附す〕

佑さんとカフェテリアに昼食を食べに行き、帰りに銀座の^{〔ママ〕}のオモチャやを一軒々々見て歩いた。

二十六日

家でクリスマスの祝会を開くので、朝から兄と室の装飾で忙がしかった。二時半頃、やっと飾り付けが終るか終らないうちに、順ちゃんがお友達の柴田すみ子さんて云ふ人をつれて来た。而して晩までには荒川さんの子供達三人、瀧さんの千鶴子さん、江波のつうちゃん、小城さんの女の子五人、其他に小林さんの弟、惣ちゃんなど家のもの供二十人集まって居た。羽根をついたり、銀貨まはしをしたり、へうたんやら何やら、子供らしい遊びの数々をして、心から子供らしく面白く遊ぶことが出来た。

佑さんは、朝八時の汽車で国へ帰った。

二十七日

午に讓二叔父様¹⁴³⁾が英昌をつれて来られたが、直きに鎌倉に行かれた。午後、英昌の入学願書を取りに、四谷の学習院に行く。帰ると綾さんが子供達をつれて来て居る。昨日ここに集まった子供達に比べて、いた／＼しくいぢけて居る。併し、さうした憐みの底から、堪え難い憎悪が首を擡げるのを否むことが出来ない。晩は、小城さんによばれて居たので行く。昌道は先に行って居たし、後から兄と浅野さんも来、近所の上野さんのお嬢さんも二人来た。遅く十二時過ぎに家にかへる。

〔欄外に記す〕

[与ふる者は幸なりと。されど与へし者と与ふることによりて、受けしことに気付きたる。この寂しさは人を捨つるに価すべく、逃れんと願ふ心に則るべし。与へ得て自ら知らざるものは幸なり。]

二十八日

午後、昌道をつれて、鎌倉に来る。梅子叔母様の処で晚餐を済ませて山に来た。讓二叔父様も居られて、十時過ぎまで花を引く。

昨夜の蒸し暑い地震の仕為か、久々にして今日は朝から暗い雨が降り続ける。打ち続く寒天に雪をさへ願った心に、この蔭鬱は無気味な圧抑を与へる。併し午後には止み上って、寂しい夕陽が黄色く照り、遠浪が薄蒼い影をこめかみの上に投げる。

✓・冬の夜の海鳴の音を遠く聞く寂しく人を恨む心に

〔欄外に記す〕

[いかばかりで尚も感恩を強ひらるる心にまさる憎悪があらうか]

二十九日

朝のうち、妙本寺の境内をぶら／＼歩いて、道哉の墓にお詣りする。午後、昌道と百合子がやって来たが、二時過ぎぶら／＼町に出て見る。本屋の店で永いこと本を見て居たが、面白さうなものも見当らないので、原稿用紙を買って、一寸梅子叔母様の処へよって見やうかと思って、八幡通を向ふへ行かうとする処で、梅子叔母様に逢ったので、そのまゝ山へ帰る。讓二叔父様は、三時の汽車で東京に帰られた。

朝から空には雲が多く、力ない日が見えたり蔭ったりしながら、日は益々うすら寒く、午過ぎた頃にはもう、光は求むるものの心にも照らなかった。而して夕には、再び雨の音が明日の心をなへしめ、夜には地震が裏書きして裏書きして過ぎて行く。

正しき故に弘正とせられ、不正として観られざることの如何に雄々しきことよ。

三十日

静かな日が何時か風を呼んで、半日裏山がごう／＼と絶間もなく鳴り響く。夜に入つて風は更に風を呼んで轟々と鳴き、海の遠鳴が物凄くまじり聞かれる。何の前兆か、何の祟か。明日は十一年の最後の日であり、明後日は十二年の元日である。

夕方嘉瑞さんがひょっこりやって来る。

三十一日

一年が又過ぎた。而して例年の通り、此の一年の間に何をしたことだらう。恐らく一つ年をとったのだらうけれど。

朝食後直ぐ東京へ帰って、夕方家の者皆と一緒に鎌倉に来る。

悲しい冬が堪え難い侮蔑を以て、自分を苛みはじめてから十日になる。而して今や最後の大鉄槌が自分の頭蓋を粉碎するかの様に、厚い重い雪雲が暗く空を被うた時、殆ど気味悪い様な救ひが突然自分の上に降りかかる。有難い。而して自分は直ぐに快く誘惑に手を差し伸べる。遠く太平洋を渡って凄まじく吹き荒む風は、待ち構へる様に突立つ裏山にはじかへされ、ものすごい渦を巻いて枝を打ち、葉を靡かせ、夜をかけて一夜、地も歪め天も裂けよと恐ろしく快い号叫となる。悲しい冬のさ中に、この轟響は何の力か。有難い！ 救である。

翌日が明けると共に日は燃えて居る。風は止まない。併し空は蒼く輝いて居る。はるかな海には、白波が踊って居る。而して蘇甦の夢が目くらます。ここは広い広い野原である。一面に春の花、菜種の黄が明るく咲き誇って居る。白い赤い蝶等は陶醉の中の陶醉に、幻の無限の夏を頌める。

裏山に風が鳴る。生温い風が鋭い輪を描いてこうこうと荒れて鳴る。

アンネは六匹の小犬をいとしんで、小屋の中にうづくまって居るだらう。まだまだ夏は遠く遥かではある。併し自分はこの有難い救に、快い誘惑に喜んで手を差し伸べる。

〔×を附す〕

〔大正 12 年〕

千九百二十三年一月

元日

朝から我が人数でお祝に引続いて酒を呑んで居るうちに、昌生叔父様の処から皆さんで来られて、昼まで続けてしまふ。午後、久顕さんと町の方に出る。帰ると間もなく、

讓二叔父様が英昌をつれて来られ、晩にはひどく過ごして十二時に寝る。

二日

朝から酒漬めになる。午後久顕さんと昌生叔父様の処へ行く。帰ると、環さん、捷ちゃんが来て居た。皆で夕方一処に島村さんに行く。妹尾さんも来て居て、また――騒ぐ。酒攻め酒攻めで、頭は馬鹿になる。腹の中は煮えて居る。東京に帰ることも許されない
ので、買はれた様な気がする。

三日

晩は皆で昌生叔父様の処へ呼ばれて行く。昼間のうちに、母上と英子さんと久顕さんは東京に帰る。

四日

午前、湯地を訪ね、昌生叔父様の処へ行く。暫らくして、中沢^{〔祐〕}さんが来たので、二時五十八分の汽車で一緒に東京に帰る。停車場で讓二叔父様と兄に逢ひ、同じ汽車に乗る。
放たれし。僅かに放たれし心よ。明日よりは！

五日

午後、江波から電話で招かれたので、三時頃から久顕さんと昌道をつれて行く。

六日

中沢氏、朝、佐世保に立つ。晩、兄弟三人、田辺さんに呼ばれて行く。例年の通り、笠さんの兄妹、静枝さん、秀雄さん、八重子さんなど集って、遅くまでかるたを取る。帰り一時を過ぎて居たが、カフェーによって、二時半過ぎて帰る。

沈滞の八日の後に、優しい夢が笑ひかけて呉れる。それが最もありふれた当然である様に、亦不可思議な偶然でもある。

而して自分は一年前の懐かしい竜胆の詩を思ひあたる――。

次に逢ふ時いじらしい竜胆は

何うして私を迎へるだらう

而して愛しい其の花が

私の為に涙を流す日とは……。

此の竜胆の興味は、決して裏切られはしなかった。併しそれは尚も自分を美しい春にまで、又、熱情の夏にまで導かふとする。

だと云って、野の竜胆は摘まるべく果ない瓶に活けられるべく、咲きはしなかったらうに！

〔×を附す〕

七日 sunday

静かな、否、蔭鬱な朝である。紫の霞の中に縋べてのものは皆、灰色にくすんで居る。ここに力ない太陽は、迷路者の如く古びた古代米に色褪せ、朝の間から雀が一声、声を立てない。少しの風もなく、心は厳かな程に重く悩ましい。唯僅かに暖かいことも、唯僅かに夜一夜の懐かしい追憶も、週日の飽満の後に覚めた現実には、一点の希望を置くには何の力もない。

子供の時から聞きなれた独逸教会の親しい鐘が、新たな謎の如く耳を打つ。兄は寢足
 らはない目をこすりながら、むっくり起き上って引摺られる様にして教会に行く。それ
 が如何なるものにせよ、兄は型の如く十字架を背負って、自らの十字架の盲馬となって
 居る。而して其の幸を知って居る。

それなのに、お、人よ傲慢者と呼べ、不遜なるわからずやと晒へ。自分は求めて求めて、兎も角も羨みながら、どの十字架にも満ち足ることをしない。何故なら、自分には十字架は唯一であり、それほどあまりにも神聖である。

〔×を附す〕

午後兄と小石川へ行く。叔母様¹⁴⁴がお留守だったので、梅子さんと暫らく話して帰る。夕方、関口氏、菊池氏とが来る。兄は小石川のかへり、目黒に行く。

八日

岡村の命日である。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
前に立った。
□□□□□□□□岡村がなくなってから満三年になる。而して自分の悲しみは更に新たであ
る。あまりに永く続いた晴れ――しい日の後に、朝から怪げな雪空が深く立ち込めて、
総べてのものが悲しい印象を与へ、暗い追憶を呼ぶ日である。自分は幾分でも此の自分
の悲しみから逃れる為に、此の悩ましさを慰める為に、又一つには、亡き友の母——寂
しい小母さんを喜ばせる為に、原宿の小母さんの処に行く。電車道に出る処を、廻り道(見)
して花屋の硝子戸を覗いて見る。而して自分は冬のさ中に、美事なカーネーションを見
出す。自分は躊躇することなく、硝子戸を押して中に入って行く。硝子戸を押さうとし
た時、何処か耳の傍で、「高価いぞ！とてもお前の菌には合はない！」と聞えたけれど、
自分は少しおづ／＼しながら、併し努めて平気な風をして、カーネーションを幾らで分
けて貰へるかと思ひながら聞いた。一本が三十五銭！

自分は財布の中に二円とは入って居ない事を知って居る。昨日自分は、神田の或古本屋で、非常にいい本を見つけた。それは実に堂々たる本であったが、版が非常に古いので、定価は一円二十銭とついて居る。どんなに自分は喜んだか。そしてつくへゝと眺めては一人微笑んだか。併し番頭が事もなげに、「二円で御座います」と云った時、あゝ、自分の其時の失望を、お金持の人々には決して解るまい。自分は重い足を尚も後に引かれる様にして家につくまで、「二円！ 二円！」と呟いて居た。だが今では、運命よ、自分はお前の悪戯に対して、何んなに有難く思はねばならないか、何んなに感謝して居るか、其の上、花屋のおばさんは、一円で立派な花束を造らうと申出て呉れる。而して大きな生々した三本のカーネーションと、みづへしい緑の滴るマーガレットと、幾本かの愛らしいスキートピーとで美事な花束が直ぐに編まれる。^{〔見〕}而して、自分はいそへして電車で飛び乗る。電車はひどく込み合っている。自分は花束を気にしながら、早く青山まで行く様にと希ふ。併し自分は、何時の間にか、次から次に過ぎて行く色々な考へだの追想に圧倒されて、道々何んな人々とすれちがったかも知らないで、岡村のうちの、豪壮な西洋館の玄関に立って居る。

斯くて自分は、岡村が亡くなってから満三年の午後四時に、小母さんに導かれて彼の肖像の前に立つ。おゝ、さゝやかな花束を以て。岡村の肖像は折からどんへ薄れて行く冬の日に、暗い白壁の中からくっきりと異常な光を以て輝いて居る。自分は凝と彼の瞳に見入ったまゝ、身動きもせず真直に前に立つ。これは死者に対する自らなる畏崇である。それを透して内に見る、未知の国へ捧げる厳粛である。過去に生きる者の悲しみであり、慰めであり、過去に生き得るものの唯一つの幸である。

^{〔欄外に記す〕}

〔我罪ならざる懺悔である。生き永らへるものの羞恥である。〕

小母様と女中達に送られて、大きな西洋館の玄関を出てからは、殆ど夢中の様だった。おみやげに頂いた包菓子をオーバーのポケットに振じ込んで、まるで逃げ出しでもする様に、すたへ歩いて居た。市ヶ谷で電車を降りると、冬の日が暮れて、鬱陶しい赤い陽が灰色の空から、一日解けもしない堀の水に悲しく映って居る。それでも、それでも、今自分の心は静かである。

〔×を附す〕

朝学校に一寸顔を出して、帰り江波の処へ行く。

九日

重く閉じた煩はしい空が、午後三時になって漸く西の隅に淀み込んだ如な陽の光をのぞかせる。併し夜に入ると寒む寒むと冷え渡って、外には雲が降ったり止んだりする。全く何日か、自分は心から笑ふことがない。家の中は合宿の様に皆が皆、離れへゝな気

持で勝手なことをしてゐる。ファミリーリティを欠いて居る。アフェクシヨネイティヴネスを欠いて居る。今のまゝの此の程度の生活状態しか許されないとしても、まだ――コンフォタブルに改めて行く道はある。それなのに……。

意志が薄弱なのか、心の安定を失って居るのか。否。それとも、自分の気まぐれが、此の穴だらけな日々の生活に導くのか、又時に斯く感ぜしめるのか。霽は静かな雨の音になり、冬だのに雷が恐ろしい響を立てゝ過ぎる。雷よ――、一つ此の俺の頭の上にも落ちて見ろ。

十日

昨夜の雨は寒さに堪えず、雪になったのである。

昨夜の恐ろしい雷は、風を呼んだのである。

而して、貧しいものに、冬と寒さ程恐ろしいものはない。二重三重の戸締りも、此の寒さと風とから、自分等を守って呉れることは出来ない。何故なら其処の障子は破れて居り、外の雨戸は古く反りをうって、戸と戸の合はせめは一寸の隙間を作って居るから、吹き入る風の寒さと恐ろしさから、いつまでも床の中に覚めたまゝ、顫えて居た自分が、八時になってやうやく雨戸をくると、外面は一面に薄雪が積って白く眩い。電線や枯枝にとまった雪は、寒風に凍って氷柱となり、カチカチと堅い音を立てゝ打ち合つて居る。古い榎の木の裏から晴れ――しい朝陽が照って、ギラ――とそこらぢうに反射して居る。美しいには違ひない。けれども自分は急いで障子をたてゝ室に帰り、再び外を眺める元気もなく、火鉢にかじりつく。熱い紅茶を飲みほすと、やっと人間らしい気持になる。

而して外の雪は少しづつ美しくなる。何故なら、小さな心の中に詩が浮ぶからである。豊かなストーブの中には、火がパチ――と燃えさかり、柔らかな肘付椅子の中に、暖かい毛皮にくるまってコーヒーでもすゝりながら、曇り気のない、よく磨かれ硝子戸〔ママ〕の中から、おゝ、色として光として、不思議な珍らしい現象として、美しい情調として、悲しく美しい物語を聞く様に、懐かしいお話しの国を見る様に、此の雪を眺めることが出来たなら！

けれども実際は正反対なことばかりである。今日自分は学校のかへりに、後からひどい風に襲はれて、帽子をさらはれた。周章てゝ手を上に支へた時には、帽子は已に三間も先きを、泥まみれの道の上をコロ――と転がって居る。手はバラ――に吹き乱れた髪の毛を空しくつかんだまでゝある。思はずも帽子を追って駆け出したが、帽子は馬力馬の足の下をくぐって、尚も先に飛んでゆく。そして自分はもう帽子を追はない。何故なら、長い髪の毛をふき乱して、左の手をポケットに入れて、右の手だけ前の方に差し伸べて、どん――飛んで行ってしまふ帽子を、空しく追っ駆けてゆく自分のみじめに、滑稽な姿を見たからである。だが幸にも此の雪道を行く人は絶えてなかった。併しやと拾い上げた帽子は、そこら中べったりと泥にまみれて、かぶる事も出来なかった。

急ぎ足に家に帰った自分は、温い炬燵に入ったまゝ、半日動きもせずちまって居る。どれもこれも些細なことである。けれども此の些細な悲みが、終日次から次へと続き、毎日毎日繰り返しかへされたなら、とりもなほさず堪え難い苦痛ではあるまいか。

十一日

自分は近頃一人で居ると、何時の間にか仕事から離れて自分の未来——ずっと先の未来ではなくて、次から次へ変って行く先き先きに就いて考へて居る。それは決して蟲のいい幻ではなく、又みじめな現実でもない。が、兎も角、未来を考へるといやになる。今、朝の七時半である。昨日積った雪は、まだ屋根の片側に、庭一面に、塀の片隅に白く寒むへこ残って居る。空には一面に雲がかかって居るので、朝の優しい日も照らず、其処此処雲の薄らんだ処だけが、黄色く明るんで居る。唯明日の事を考へてみる。

暖かい紅茶とパンとチーズとで、やっと少しいい気持ちになると、もう学校に出かけなければならない。学校へ行行って一体何をして来ることだらう。自分らしいことは何一つしないだらう。何故なら——多分は皆も同じ様な事を考へながらも、互にはくだらない冗談を云ったり、笑ったりしながら、決して互の不平やら悪意やらを隠しきけることは出来ない。そして、午過ぎには家に帰って来る。するとその同じ気持ちが、自分が愛する人々であるだけに、堪え難く感ぜられる。寒いので又半日炬燵の中にぼんやり過ごすだらう。而して読み度い本も買へなければ、快活に自分の心を引立てて呉れる人もなし、又しみりと話をする人もないので、又々自分の心と悲しいうちあけ話をするより外ないだらう。

おゝ、自分が近頃如何に雄弁になったことだらう。併し、悲しいことに心に斯くも雄弁になってゆく間に、自分は人に対して如何に陰鬱に無口に、おづへしてゆくことだらう。あらゆるものの融合とか調和とか云ふものは、決して考へられ得べきものではない。おゝ、今日は父がなくなって丁度三年と四ヶ月目の十一日だ。その日、こんなことを考へることがほんの偶然だらうか。何故なら自分の此の分裂は、丁度暖かい情深い親^{〔象〕}切な唯一人の自分の愛の対照であった、懐かしい父がなくなった日に始まったのである。まったく自分は其日はじめて幻の自分ではなく、自分の未来に何んな運命が待つて居て、自分を何んな風^{〔ら脱力〕}に導くであうかを恐れたからである。

〔柴山矢八〕

祖父、出京。

十二日

昨日の恐ろしい予感^{〔象〕}は、支離滅裂に裏切られる。朝は暖かく、太陽は輝かしく、快い南風が荒れて、残りの氷雪も見ると姿を消してゆく。互の不平や悪意はまぎれもなく

続く。然し、新らしい意識が自分を導く。彼等は総べて此の上もない善人である！彼等は各道の為に、使命の為に闘つて居るのである。社会と闘つて居るのである。制度と戦つて居るのである。生存の悲みと戦つて居るのである。さなくとも、悪の女鬼と戦つて居るのである。斯くして彼が善人なれば、不平は愈々彼を苛み、悪意は益々彼に憑くのである！

祖父，帰鎌。

十三日

厚い靄の後から、汚柿の様に染っばい日が悲しい涙を以て、自分に挨拶する。電車の中に席をとると、自分の前に妖艶な女が自分を見て居るのに気がつく。其の眼が自分に（睨）向ってしっきりなしに慣々しく喋り続ける。

「まあ、なんてあなたは悲しさうにお見えなさるんでせう。あなたの髪の毛は立派ですこと。ですがまあ、あなたのお心の様にも悲しく、頬べたの両側に縮れてゐまわ。^{〔す脱力〕}あなたは寒いではありませんか。それとも何か、不平でもおありになるのですか。一寸あたしを見て御覧なさい。楽しさうでしょ。えゝ、私はいつでも楽しいのです。私は一年中こんな風に綺麗に、花の様に、雲の様に飾って居ますの。そして、よく喋るでせう。えゝ、私はこうしていつも――快活にお喋りを致しますの。ものまねどりのようにね。あらそんなにむづかしい顔をなさるもんではありませんよ。まあ、一寸でも、私と一緒に来て御覧なさい。私は、それはうまいこと方々飛んで歩きますよ。まるで蝶々の様に、花から花へ、美しくさへあれば、おいしくさへあれば、死ぬまでも飛んでゆきます。汚ないもの、悲しいもの、なんともないもの、そんな物はふりむいても見やしません。そして、おいしいものを食べて、綺麗なもののばかり見て、いつも楽しく笑ってゐますと、ほら、自分までがこんなに華やかに、こんなに美しく明るく、而して、快活になつて来るのですよ……」

自分は堪らなく不愉快になってくる。自分はいきなり立上って後を向いてしまふ。自分は室に入って仕事に取りかかる。併し昨日大事に包んで置いた土は、益々堅くこわばってゐる。ドアが開く、そして A が入って来る。B が入って来る。C が入って来る。そして、皆で自分の心を取りまいてしまふ。自分は仕事を投げやってストーブの傍に立つてしまふ。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□

〔×を附す〕

学校から帰ると、中井氏が来てゐる。晩には岡田が来て、十時近くまで遊んで行く。

十四日 sunday

天気はまた――好くない。冷たい北風が吹き廻って、心は全く灰の中に埋もれてしまふ。午後、弟と神田に行く。本屋と云ふ本屋が自分に向って挑戦する。人は蛆虫の様に多く群り、自分の求めるような本は何処にも見当らない。

東京堂の奥に人いきれにむせかへって居ると、突然ひどい地震が襲って来る。大きな建物はギーギーきしみながら揺れ、電燈は宙に迷って左右に振れる。館の中は異常な驚愕と不安に動揺し、人々の過半は呻き吠えて往来に飛び出す。犬め、自分は気を悪くして外に出る。小さな小綺麗なカフェーに行つて、ココアを二杯詵える。

それで自分は幾分暖められる。顔が少しほてって来る。けれど、結局又、寒風に震えて家に帰りつく。室に入って火鉢にあたり乍ら、体は益々震へてゐる。背中からは絶えず水を浴びせられる思ひがする。目の心が痛んで涙が渲み、頭はくら――する。自分は熱に犯されて居るのである。

体温器に相談する。八度五分！よし、自分の心は^{〔漠〕}莫然たる怒に燃える。何が自分に反抗いてゐるのか、何が日日自分を斯んな風に導くのか。自分は罪を負ふ。自分は罰を受ける。けれど、決して卑劣を宿しはしない。自分が早く床に着く為に雨戸を閉める。三枚目の戸を押した時、先の戸はひどい響をたてゝ外に落ちる。再び怒がかつと燃え上る。然し自分は直ぐに双手を挙げて笑ふだらう。自分は今六ヶ月前に見たスカンデナヴィアの師の「^{〔獄〕}地獄」を思ひあたる。

十五日

雲が薄白く地を被ふて居る。

熱が高いので、目を開いて居るのが苦しい。足腰がひどく痛むので、よい寝が妨げられる。一日うと――し乍ら、静かに降る雨の音を聞いて居る。

^{〔欄外に記す〕}
[十五日]

午前十時 九度四

正午 九・五

午後六時 九・二]

十六日

昨夜は、八時過ぎから十二時前まで寝たらしい。それからは目が冴へて、もう寝らない。熱が大分下ったので、ゴーガンの手紙を読んで居る。腰の痛みは何と云っていいかわか

らない。鼻の奥に、何か胸の悪い臭がついて居る様で不快である。さっきまで降り続いた雨が止んだらしく、今午前五時、外は風の音がひどい。

夜が明けてからも風は止まないが、午までは日が暖かく、枕元まで射し込んで、気分はよくなる。午後、寒い雲が出て、乾いた風が荒れ廻る。鼻の奥から目もとまで熱く脹れて居るので、頭は馬鹿のようである。

〔欄外に記す〕

[十六日]

午前二時 八・一

午前六時 七・六

午後二時 六・九

午後七時 七・六]

〔欄外に記す〕

[十七日]

午前六時 八・〇

正午 八・〇

午後三時 八・五

午後八時 九・三]

十八日

真夜、病の床の辺に

シー……ンと煮え沸った鉄瓶がある

白い湯気が冷えきった冬の気を

ゆらへーと揺って昇ってゆく

消えてゆく

真夜、病の床の上に

その音を聞きながら不思議に亘える心である

ひっそりと静まりかへった室に

熱をもった節々の痛みを忘れかね

半ば閉ざされた重い瞳に

遠い昔のことまでが、光となり

闇となっては、過ぎてゆく

〔×を附す〕

〔欄外に記す〕

[十八日]

午前五時 八・六

正午 八・一
午後四時 七・五]

十九日

昼間、倉沢が来て、悲しい話をして泣いてゆく。晩には惣ちゃんが元気さうな顔してやってくる。(倉沢に手紙をやる)

二十日

風もなく黙り込んだ日。空には雲が多く、日はちらっと覗き見しては、直ぐに姿を隠して、次に来る蔭を更にも悲しくする。自分は今、静かな心を求めて居る。或は、寒く冷たく、或は隠険に、或は強迫的に、人の心を脅やかす。日々、決して詩の生れないのは当然である。

まだまだ一月半の間は氷も薄らがないと思ふと、只々情なくなる。(倉沢に手紙かく)

二十二日

ひどい風が吹く。併しそれは南の国から吹く快い風である。はりつめた氷は僅か一日で残もなく溶ける。凍てついて堅くなった地は、ほぐれて柔らかい土にかへる。暖かいので、今日から学校に出る。夜雨。

二十三日

夜来の雨は止んで、一枚の幕の様な灰色の空がちっと地を押しつける。空気は、樹々は、屋根は、土は、堆く積んだ古い落ち葉は、総べてはじっくり湿ってゐる。赤らんだその落葉の間に、八手の子はよい雨に勢力を得て、青く沢やかに光ってゐる。

三越に漫展を見る。晩は関口氏が来て、遅くまで話して行く。

二十四日

雪が降る。夜に入って雨となる。

二十五日

雨が止んで、直きに雪が降り出す。夕方、兄と雪の降る中を傘もささず、あてもなく外へ出る。雪道をどん／＼歩いて、関口氏の処へ行く。関口氏の処をふり出しに、三人で又々雪の中に飛び出す。夜に入って、雪は六、七寸積んで止む。そここのカフェーで酒を呑んで、夜中の二時に家にかへる。

二十六日

学校のかへりに、倉沢と倉沢の家に行く。堀田の様な堀澤から、本所¹⁴⁵⁾の臭ひが鼻をつき、何処からともなく本所の音が耳を被ふ。小さな火鉢を囲んで、倉沢の物語を聞く。夕方、街へ出て、カフェーに飯を食ひに行く。此のあたりの一番のカフェーである。けれど、女達はルルの様に股を開いて、ストーブを囲み、猥らな声で、猥らな歌を唄ふ。三浦が来て居る。而して、倉沢との間には、心ならぬ悲しい対立がはじまる。戸が開いて孤児院の小供が筆を売りに来る。「ま、今日はよかったよ」、「明日おいでよ、明日は買って上げるから」、「いらないって云ったら、図太いね」、「お帰りったらお帰り。でないと、もう決して買ってはやらないよ」、「あんた、押売りするのかい。寒いから、閉めてお呉れよ」。

而して、無愛想にひどく戸が閉められる。「まだ立ってるよ」、「可哀さうだね」、「買ってやる気なら、たんとおいひよ」、「可哀さうなだけれど、可哀さうじゃないよ」。小供は戸の外に確に三十分立ち続ける。而して、時々黙って中を覗く。彼れには、院の罵詈雑言に比べては、この堀澤と寒とはまだしも暖かいのである。而して皆が忘れた頃に、悪魔の声が響く。「やっとなってしまったよ」。来る人も来る人も、決して少しでも自分を落着かせては置かない。三浦が帰ってから、たーさん^{〔紹介〕}に照会される。可愛いらしい娘。けれど、彼女も亦、自分で自分の心が分らない女、自らあやぶむ女、暗い未知の中に手さぐる女、伴を知らない伴の女、けれど殉情の女、羞恥の女、時の女、よき女、而して、それ故に男には堪えられない辛い女、可憐な女、女である。十一時半、暗く湿った心、本所の様な心を以て家に帰る。

〔×を附す〕

二十八日 sunday

冷たい風が吹くので、一日室に閉ちこもって居る。

二十九日

本所の臭の中に、蔭惨な響の中に、ルルの様な女を見てから、心が不思議に闇に閉ざされて軽快を失ふ。学校のかへり、小城さんに行く。兄が昨日から宿って居る。十時、保ちゃんから東洋美術画譜を借りて帰る。

三十日

夕方から帝劇に行く。伊太利歌劇団のマスカーニのカヴァレリア・ルスチカナとレオンカヴァルロのパリアツチオである。パリアツチオの方は粒が揃って居たし、熱もあって非常に面白かった。前のはサンツツァの一人舞台で、外の者達がどんと落ちて居た。惣ちゃんと野崎が来て居たので、帰りにパーラーに行く。古川さんにも逢った。其他自

分の学習院の同級生で、其後自分が一番興味を持って居る一人の岩倉良具¹⁴⁶⁾に逢った。もう体もすっかりよくなって、元気さうなのが非常に嬉しかった。今哲学をやって居ると云って居た。「さうだよ。何んなことをやるにしても、十年間は黙って一人でこつ――やらなくちゃね」。まったく岩倉は、黙って十年でも十五年でもやって居られるのだ。自分もそんな境遇にあったらどんなにいいだらう。併し自分だとて、これから二十年間、耻をかきながら堪えて行くことが出来て、尚二十年生きることが出来るならば、その二十年の耻を最後の一つの作品で雪ぎ度いものである。(佑さんに手紙を出す)

二月一日

何うした日か、一般感情は決してよくない。学校のかへり、黒門町で自分の乗った電車が人をひく。而して万世橋までさんざん待った上句、歩かねばならない。^{〔拳〕}万世橋でやうやく乗った電車は寿司詰の様に込み合って、身動きも出来ない。帰ると、文ちゃんから電話で、今日の帝劇の割引券が余って居ることを報らせて来る。而して自分は飛び上る。何だか落着かず、そろ――出かけ様とする処に、再び電話で断はって来る。(尤も最後のバターフライの切符を譲り受けることになる)。而してこうなると、もう遮二無二行かなければならなくなる。而して先達より一時間も早く出かける。処が帝劇に行くと、もう人は半分程も行列して居る。二時間近くもまって、やうやく一番後の列に席をしめることが出来る。今日は、グノーのファウストである。不出来！殊にオーケストラは出鱈目に乱暴である。メフィストはRuffで、ファウストはひどく貧弱で、マルガレーテはきざで、ヴァレンチンはズンベラボー。

併し斯う悪口をならべて見ると、気の毒である。メフィストは、中で最上の出来である。声量も相当に豊富であり、殊に表情と云ひ、ゼスチュアと云ひ、非常に頭を用ゐて居ることは明らかであり、劇に対しては充分な理解と効果を齎らす。マルガレーテは、少しのいやみを除けば、誰よりも洗練された美しさを持って居る。ヴァレンチンも確りして居り、活躍もしないが、決して聴き劣りもしない。ファウストは併し、欲目にも全然駄目である。^{〔欄外に記す〕}殊に四幕のファウストに切られる所から幕切れまでは、立派なものである。

ところでファウストと来たら、声は貧弱で下卑てゐて、其上時々突飛な叫びを叫ぶ。]而して、繰返してオーケストラの喇叭を呪ふ。

併し今ではもっとももっと讚め度い気がする。何故なら、此の失望は先達非常によく纏ったパリアッチを見た自分が、この大物のファウストに、同じ様にあまりに大きな期待をかけて居たからのことであるから。併し四幕目で、たった七八人の兵士達が、意気揚々と一列縦隊で凱戦した時には、満堂ドット失笑する。是れは人数を儉約する旅興行の悲哀ではあるが、何か泣き笑ひを堪えることが出来ないような変な気持ちがする。

兎も角も、今では非常によかったとは云へないまでも、非常に面白かったと云ふことが出来る。

三日

また――母と兄との間の黙闘が煽り立ちかかる。兄は一日留守にして晩に帰ると、自分の室に来て、色々なことを質問し訴へ、語る。何故こんなことが起るのか。性格の相違は何うすることも出来ない。唯にっちもさっちもなり得ない、感情其物に対する理解と同情が、余りに貧弱だからである。而して、黙闘程人を自他互に苦しめるものはない。而も人は、自ら何処かに敢えて苦しみを求めて居るとさへ思はれる。ぐだらないセンチメンタリズムだ。而してそれだけでも、訴へられ救ひを求められるものの退屈さには充分である。而も時に当れば、自分の「時に引かれる心」と殉情性とは、直ぐに自分を虜にしてしまふ。

(文ちゃんに手紙かく)

四日

昼間、中井さんが来て居たが、夕方から帝劇に行く。

マダム・バターフライである。第一幕で、ほんの主役の一人二人をのぞいては、皆全然支那系統の服装をして居るので、而して動きにも支那に近いものの方が多いので、随分奇異な感じがする。併しこれは全然仕方のないことではある。(併し日本が長崎以来、即ち維新以来既に六七十年経た今日、而も其後現今に到っては世界の一等国の一つに数へられて居ながら、其の風俗習慣に就ては、欧州人が斯くも貧弱な智識より持たないことも、寧ろ驚かざるを得ない。是れは、音楽の或る部分が、全然支那の胡弓の旋律を基定として作られて居るのにも明らかである。恐らく彼等には、日本としてより東洋としての先入主が余程深く根づけられて居るのであらう。) バタフライ及スズキだけは丸帯をしめ、袖の着物を用ゐて居る。而もバターフライのなどは、頗る現代的の裾模様を持ったふり袖である。これは確に帝劇の注意によって、せめて主役だけでも斯くさせたことを直ぐにうなづかせる。髪などにも余程の苦心が見られる。即ち、全然其の法方〔方法〕を知らない彼等は、丁度画家のスケッチの如く、デッサンだけをとって、あのもちゃ――の毛を以て日本髪を作って居る。処で劇はどんな風だったか。

第一幕は、全然予想外である。奇異の為に、殆ど滑稽と不快のうちに終る。併し次の幕には、自分は此の奇異に慣れ、而して音楽を聞き、劇を見る事が出来る。音楽は美しく、劇は此上なく立派にアクトされ、写実の日本を離れることはあっても、全体はよく一貫され、而して特殊な空気を作る。恐らくは異国的である。故を以て、平気で見のがしたファウストなどよりも、今日のバターフライは、数等よく演出されたやうである。

全部を通じて、バターフライは非常に活躍する。第二幕の「美しき日に」などは、限りなく美しく歌はれる。バターフライが非常に華やかにアクトする一方、スズキは全然

対照的に実にじみである。併し是れがバターフライの直接的な悲喜を運命の悲劇として、人間の悲哀として、静かに併し同情を以て悲く眺めて居る姿として、強く現はれる。花を飾りながら歌ふ胡蝶とスズキの静かなデュエットもよかったし、それから引続きオーケストラと舞台裏の静かな合唱だけで進行する幕切の舞台は、ひどく美しく情調に富んだものである。而して此の部はアンコールされる。

シャープレスは、スカムッテとよく共通した処を持って居る。声は豊かで、キビキビした処があつて気持がいい。ピンカートンは、先日のパリアッテ程には活躍しないが、舞台を落す様なことはない。

〔欄外に記す〕

〔胡蝶・アムプロゾ

スズキ・バラリン

シャープレス・ピガルディ

ピンカートン・デオルジ〕

五日

学校から帰ると、芳賀桜¹⁴⁷⁾が来て居る。晩皆で芳賀を連れて三河屋に牛を食ひに行く。

六日

午後三時頃から、気がむかなかつたけれども、待つて居ても気の毒と思つて、岡田の処へ行く。自分の他に岡田の友達が三人来て、解つたような解らないような話をして、遂々終電車で帰る。又そろへ人とはなれ度くなる。

七日

朝から乾いた雪が降り出し、学校の終へる頃には、已に二寸近く積もつてゐる。かへりに、笹塚に行く。電車で文ちゃんに逢ふ。宇田ちゃんと夕食の卓に着かうとすると、昇さんが帰つて来る。園ちゃんも遊びに来て居たので、九時半頃、園ちゃんと水村さんに行く。君ちゃんは土曜日に演奏会に出なければならないので、一生懸命に勉強して居る。彦さんもひーちゃんも、おちいさんも居ないし、雪は益々ふり、風がひどく吹き出したので、宿つてしまふ。

八日

雪はひどく積もつて居る。君ちゃんと一緒に学校に行く。電車に乗つた頃から、又雪が降つて来る。昼前家にかへり、午後、角力の優勝祝賀会上野の精養軒に行く。ひどく寒く、而して来て居る人達も気持が悪いので、早く帰る。夜遅く、中井さんが来て宿る。

九日

朝のうちから、中井さんと笹塚に行く。宇多ちゃんを引張出して、守山公園の向ふの坂にスキーをしに出かける。一時過ぎまですべって帰る。昼飯はない。お茶を飲んで居る処に昇さんが帰ったので、夕方又、スキーに出かける。暗くなって帰る。夕食が又ない。

十時家にかへる。

〔柴山矢八〕

祖父、出京。

十日

学校のかへり、音楽学校¹⁴⁸⁾の土曜演奏会に行く。

〔欄外に記す〕

〔祖父帰鎌〕

十一日 sunday

何故人はかぎりない対象の中に

唯一つの望を捨てることが出来ないのか

何故人は当然の可能を措いて

未決の不安の中に顫えなければならないのか

そは望は生命の生命である

そは意志は絶対である

是れに依て絶対意志が

ほんの僅かの可能性を失はないかぎり

相対意志への屈服は死である

〔×を附す〕

私のキスを受けて御覧

お前はきっと泣き出すだらう

私のキスに堪えて御覧

お前はきっと焼け死ぬだらう

今迄にどの女一人

私のキスに堪え得たらう

みんな泣きながら逃げ出した

私のきつい復讐のキスに

私のキスを受けて御覧

此のきつい復讐のキスに
若しもお前が堪え得たなら
お前こそ、お、本当に私を愛してゐる！

〔×を附す〕

日中は珍らしく暖かい。先日の雪は一時に溶け出して、樋から溢れてバサバサと土を穿つ。午後、古本さんに行つて、夕方帰る。

十二日

暗い夜に雨の音が寒くけだるげに響く
自分は机に向つて数多い古美術の写真板から目を傍の詩集にうつす
頭は混乱の中に不思議に亘える。幻が次ぎ次ぎに過ぎる
「しかし、笛の音はない夜のこと」と……
奥の八畳から兄のヴァイオリンが
ローデのコンチェルトを送り
台所に隣る弟の室から、モツァールトのソナタが響く
混乱の頭に判然と過ぎては現はれる影
興福寺の静かな併し崎怪な六つ手の阿修羅王
新薬師寺の十二神将の堅くこわばった目の恐れ
豊満な肉の香に、神秘の影をそつとなげる
法華寺十一面観音の長い長い手
さては、夢殿の秘仏、百済観音の横顔
眼を誘ふ冬の雨の中に
二つのヴァイオリンの二つの曲を静かに聞き分け
目は確りと詩集の上に植えつけられる
「しかし、笛の音はない夜のこと」と、……
暗い暗い夜のこと
雨の音けだるい冬の夜
混乱の頭の中に
不思議に亘え渡る心で
異国の楽の音を喜び
千歳の古く珍らしい彫像を呼び
労れた目は一つ言葉に堅く堅く結ばれる
「しかし、笛の音はないよること」¹⁴⁹⁾

〔×を附す〕

十三日

雪どけの裏庭の隅に
堆く吹き寄せられた去年の落葉^{こそ}

時々さらさらと竹藪を鳴らして過ぎる
朝の風

柚の葉は乾いて葉先から黄ばみ
青木の厚い葉裏に赤い実がのぞく

お倉^やの廃れ壁から白い貝殻が一つ
ぽたと黒い土にずり落ち

古い枇杷の木の向ふに、柿の木の枯枝のひまに
これはまた灰色の、灰色の空——¹⁵⁰⁾

〔×を附す〕

光ない空から
目に見えない灰が降る
細かい灰の屑が降って降って
大気は重く真暗である

風は生温く
街は湿っぽく
雪どけの道はぬかるんでぬかるんで
轍の跡にどふとろがうごめく

黒塀の上に
野ら猫は淫蕩な叫びを残し
酔どれが二人
喧嘩しながら仲よくよろめく

早く、五時には日が暮れ
六時に明るいカフェの一室に
熱いココアが運ばれる
そして身に覚えのない憂愁が影をひく

おゝ冬の日の、冬の夜の
現実の、幻想の
冷たく、厭はしく、醜くく
はたまた、真実なる

〔×を附す〕

午後、中井氏が来る。夕方、中井氏を送って四谷見附¹⁵¹⁾まで出て来る。

十四日

此の裏庭にも春が訪れた
窓と廂とで小さく句切られた
四角い室は蒼く霞み
がけした
崖下の小学校の渋色に
閑かな日がさしかける

柔らかい風が
若やかな回青橙の香を送る
八手の葉にはじめの虻が飛び
廂の上に古い雪が
忙がしく溶ける音がする

竹藪のひまに
赤い屋根、白壁が光り
湿った土に芽ぐむ春のほひ
遠い普請場の槌の響が
ラオ屋の笛にひっかかる¹⁵²⁾

〔×を附す〕

四月の旅行に備へる為に、今日から仏様とお寺の研究に入る。朝から晩までかかって、

〔法隆寺〕

法隆一つ片がつかない。あの弥陀浄土の壁画に來ると、いきなり遠い所に思ひが走り出す。アヂヤンターはどうしても知らなければならない。ガンダラも是非のぞいておかなければならない。ギリシヤも思ひ出さなければならない。机の上は、本と写真版と原稿用紙と字引とで堆かく埋れてしまふ。それに並行して興味がつのり、暫らく忘れた世界が目まぐるしくちらちらする¹⁵³⁾。

橘夫人厨子内阿弥陀三尊仏

これはまた可憐な仏様
西方浄土に高在まし
宇宙実在の明光を
無限無量の
万生の性徳をおそなへなされ
二分のお悦びに
三分の御慈悲
残りの五分を、蓮座の上の安泰に
女子のようにお羞ちらひなさるいちらしさ
これはまたお似寄りの
お供に置かれる菩薩様方
軽やかに麗しい天衣のうちに
しなやかに優しい御腰を包まれ
御胸には
其の御心にも似てつつましい
十三の小娘の小乳を
これはまた同じようにも、お羞ちらひなさる

さてさて御邪魔にならぬようにか
後障にそっと浮き出た天女方
喜ばしげな
思ひ思ひの身振り姿に
甘へるように、柔らかく絡んで纏ふ
衣はそよ風^{きぬ}に流れてか
そっとすねてもみたいのか
これはまた編纏圍繞どこの霞へ続くことやら¹⁵⁴⁾

〔×を附す〕

十五日

夢殿の写真版をじっと見守るうちに、突然新らしい興味が自分を捕へる。自分は今、ラヴェンナの洗礼堂を思ふのである。時、処を異にして現はれた、同じ様に単独なる八角堂の対比である。同じ八角堂建築の此の相違は如何であるか、是れは、木造と石造との相違、材料の相違ではない。同じ様に緩やかな傾斜を持つ屋根が、如何に全々別種の印象を与へるのか、ラヴェンナの八角堂と強^{〔雖〕}も決して少しでも安定を疑はせるようなものではない。

而も、夢殿は純然たる土の建物であり、ラヴェンナのそれには、已に天への雅神の指示が明らかに読まれる。此の感じは何処から来るか。夢殿の屋根は、全体に極く緩やかな美しい曲線を為して居る。而も是れから角度を変へようとする所で、煉瓦が二段にくひちがつて、新しく生れる傾斜の急な刺戟を程よく和らげて居る。此の建築の持つ縦の線は、すべて適宜な横の線によって妨げられる。

最も縦の感じを持つ樞子の縦格子さへも、上下を更に確りした横の線を以て挟まれ、唯一つ、縦長い扉は横列の大きな釘頭の幾筋かによって正しく横の感じにされて了ふ。樞子の上の平たい白壁は、更に太い横の線で二分され、欄は低くおしつぶれ、裾は更に二段になって外にはみ出し、四方にずり出たような階段が同じ感じを強張^{〔調〕}する。豊かにはみ出した屋根の廂と周廊の外廊とが、内側の八角柱に対して相似の、更に太く短かい角柱を以てとりまいて居る。

ラヴェンナの洗礼堂は如何であるか。完全な八角柱からは、何一つはみ出して居ない。(尤も、一角に裾の所に妙な弧状の張出しがあるが、問題になるようなものではない)。角柱の各縁は地から、僅かに出た屋根下まで、完全な垂直線を引いて居る。三層の積上げの感を持ち、下層の入口も中層の窓も、上層の窓形装飾も、すべて縦に長く、殊に上層窓形の上端が更に縦に二つに切り込まれて居るので、細長い感じを強める。

夢殿の頂には、平たい皿形の上に、宝珠の玉が座りよく置かれ、洗礼堂の頂には、デリケートな十字が顫えて居る。

而して、此の二つの精神の相違が後の世に開展して行く姿を見よ。夢殿は、後に土の教へ儒教を呼んで、重く地上に横はる平屋の御殿建築を導き、洗礼堂は、その自らなる精神に従って、ルカのサン・ミケレ寺の奇妙に高い高い切妻となり、やがて林のようなゴシックとなって、憧憬の天へと昇ってゆく。(ヴェロナのサン・ツェノーネ寺のカムパニーレと五重塔についても同じことが云はれる¹⁵⁵⁾)

夢殿に在す観音様は

横から拝んだらお顔と云ひ

緩やかな流れのようなお体と云ひ

美しい透彫〔宝〕の法冠から
 同じように優しく流れ出た錦紐と云ひ
 おすがり申し度いような
 涙ぐましい仏様

前から見たお姿と云ったら
〔宝〕法冠からお顔にかけて
 支那芝居の馬鹿大名
 慎ましい上半身には似もつかない
 無様にこわばって開いたお足
 水をはなれた金魚の鰭のよう
 融通のきかない御法衣とは
 ても二度びっくりな¹⁵⁶⁾

〔×を附す〕

十六日

静かな春の雨が音もなく降って居る。しめやかに霞んだ空気の中に、青桐の黄ばんだ太い幹にも、黒く濡れた柿の枝にも、柔らかなセンチメンタリズムに導くような何物かが感ぜられる。併し、昼近く、雨は烈しくなり、冷たい風が加って、春の夢が醒めると、また――炬燵の温もりが恋しくなる。一日学校を休んで、相かはらず寺仏三昧に入る。天平期にだん――深入りして行くと、もう中宮寺の観音様の慕はしさがなくなって、圧へつけられるような力の芸術にばかりぶつかって来る¹⁵⁷⁾。

古美術の余りにも優秀なものにつけても、其の作者（全々知られて居ない）を支那人乃至は朝鮮人と直ぐに結びつけないでは考へられない人々は、一体何んな心なのだらう。明らかに唐人であり、朝鮮人であった処で、已に我国に帰化し永住し、我等を生んでくれた祖先である。而も偉大な人々を、何故ならば、そんなにも外国人扱ひにする必要があるのか。勿論、無から忽ちにして、斯くも偉大なる有が出現することがないとしたところで、即ち之等の諸仏が、或は、唐風を伝へ、或は西域の趣味を、或は遠くガンダーラ〔初〕の手法を見せた処で、其等の何の遺物にも全々見られない或物（我国にして始めてあらはれたもの）が、絶体〔対〕に見出せないと云ひきることの出来る人が何処にあるか。乃至は、これだけの遺物が他の如何なる地に現に尊ばれ保たれて居るか。是等の作者がもと外人であり、外国で学んだ人々であった処で、彼等は字義通り、我々の祖先であり、是等の遺物は現に、我等の国に立派に存在するのである。これで沢山ではないか。勿論、歴史、人心、思想の推移として、文化の相関乃至影響として、遠くギリシヤにまで逆って対比することは、頗る興味多く大きな価値（それ自身としても）あることではある。而も後

なる者が、先なるもの^{〔の脱力〕}の開いた途から出発することは、頗る当然なことであり、それ故に後なる者のもつ価値を少しでも傷け、名誉を落すことはないのである。要は、是等独特なる、優秀なる芸術品を我等が（我等の祖先）が真正に受け入れ、現に幾多の傑作を保ち伝えて居る事実こそ、我等の名誉とし、誇とする所である。

天平から藤原にかけての多くの吉祥天女の駄作を、自分は其の製作動機の消極に帰さうと思ふ。即ち道鏡が主導した吉祥悔過会が必然に生み出した醜態である。そこに何等他の仏像製作に見られるような情熱（宗教的情熱乃至悦びの奉仕）が見られないのは寧ろ当然である。而も此消極的な作者に対して、「吉祥天大功德品」は、能ふかぎり美しくせよ。而して瓔珞環循華鬘^{〔宝〕}法冠を以て、能ふかぎり美しく裝飾せよと強ひる。斯くしてここに能ふかぎり美しい、おゝ唯能ふかぎり美しい、幾多の吉祥天女が生れるのである。

併し此の貶罵は、自分が宗教的の立場から見、幾分でも本質的な吉祥天女に呈しようとするものである。若しも一個の女、男の前の女の表現としての立場から見ならば、問題は又別になる。（何故なら、恐らくは消極的な不満に堪えない。作者等が、うちに鬱勃として燃える芸術的欲求から、その束縛の蔭に、私かに彼等の表現の対象を換置した^{〔欄外に記す〕}らうことは、余りに容易に想像せられる）。[此場合には、作者は全く積極的であり得るから] そして、實際其等のうちに「唯美しい」処を飛び越して現はれたものは、全く近代的な或る挑発的な、或は淫靡とさへ見える感能其物である¹⁵⁸⁾。

十七日

古昔から現今（或は近代）に至るまでの、我国のあらゆる芸術を一貫する最も特色ある伝統——それは所謂「腹芸」にある。外的なる運動姿態乃至それから必然に産れて来る、流動する線、節律から直接に受ける印象よりも、不動のうちに無限の雰囲気を導出し、無言のうちに無量の言葉を語らうとするスピリットこそ、尚しとせられる。それは、日本画の微妙なる筆法となり、彫刻の沍へ渡る刀法となり、動きの少ない、それで居て汗を握り、肩をこらせる舞楽、能となり、さては勧進帳の安宅の関を産み出す。^{〔欄外に記す〕} [これは必然の結果として、殆ど極端にまで類型を造り出して来た。而して此の細末の技巧がともすれば^{〔墮〕}惰落に導かれる。それ故に、こうしたスピリットの中に、まだ技巧の或は類型の基準の確りと定まらなかった古代に於て比較的、否最もめぼしい多くの傑作が残された。]

如何にか緊張せる、如何にか貴ばるべき道よ。而も一步をあやまれば、如何にか危険なる道よ。それはほんの僅かの緩急にも直ちに左右せられる。即ち惰落^{〔墮〕}せる、それ等は忽ちにして、技巧の遊戲的技巧の奴隸である。而も技巧的であるだけ観賞者等の遊戲心

を満足させ得る故に、それは益々椿落し易い。^{〔墮〕}

もう十二時だ。此の短語は更に時を待て、更に詳細につっこんで行かねばならない。

夕方、尾上が来て、久々で皆で一緒に飯を食ひ、九時頃帰る。

十八日 sunday

✓ 梢々に黒く枯れたる柿の蒂のうす光りせり早春陽に
✓ 籠らひて文など読める窓のべに藪の笹葉のしばしささ鳴る
✓ 藪かげの漏日のひまに目白はも動き止まなく可愛きものかな
✓ にはたづみふむ人もなく真澄みゐて春めく空をちさく映せり
✓ 闇真闇更け渡る夜を玻璃窓のへに柚の葉の寒く光れる

昨夜は冷えたと見えて、珍らしく真白に霜が降って居る。併しつゞく日は暖かく春めいて、霜は間もなく消えてなくなる。

昼前のうちは、おとなしく机に向ふ。午後たまらなくなつて、弟と一時間程そこらを歩いて来る。五番町の小さな公園には、そこらの子供が^{〔山脱カ〕}沢出てきて遊び、堀ばたのベンチに同じような人々が暢気さうに座る。兄は朝、教会に行ったまゝ、帰らず、母と妹は鎌倉に行く。

夜は暗く静かである。暖かいので窓を開け、何げなく見上げた目に、壁にかかるメフィストフェレスの面が、意味ありげな微笑を浮べたまゝ、さゝやかな風にゆら―と動く。自分で買って来てかけた此の面が、何だか今宵恐ろしい。それで居て、相変らず窓を開けて置く。而して、時々壁を見上げる。面は笑ひつゞけ、ゆら―と動く。そしてその恐ろしさが妙に自分を満足させる。地震がもう極点を過ぎて消えてゆかうとする時、よく思ふ。「もっとゆれて見ろ」と云ふ気持に似る。――

昌道に手紙を送る。

十九日

昨夜は十二時に寝やうとして、机の上など仕末して居る處へ、兄が保さんをつれて帰って来た。兄と保さんとは、これから酒を飲まうとして居るので、自分は一時半に床に入る。三時に目が覚めると、隣で弟も目を覚まして、煙草をくゆらして居る。兄の室から、大きな話声が^{〔聞〕}声こえる。朝起きると、兄も保さんもまだ起きて居る。兄と保さんとは、飯も食べないで出て行く。学校のかへりに、水彩画会¹⁵⁹⁾と新光洋画会¹⁶⁰⁾の展覧会を見る。水彩画会は、数ばかり多くて、まるでつまらない。勿論、数多い中には二、三好きな画もある。^{〔新光洋画会〕}太平洋画会の方には、胸の悪くなるような画もあると同時に、気持のいい画も

沢山にある。帰りに三沢をひっぱって来る。

✓葉も枝も動かずなりて庭木立 灰色の空にぽっかりと浮く
✓まちの子等ののしりあへり 豆腐屋の笛も交りて ゆふべかしまし
✓夕かもかしまししかもまちの子等 群れてかしまし 春ぞこしかも

二十日

寒い雨が降る。九時には雪がまじって盛に降り、十時には大粒な湿った雪になり、あたりがうす白くなる頃、風がひどく、乾いた雪が益々降りつづける。大粒の雪がまたまた加はって、三時に止む。ひどい風が残って、夜に入るまで吹き続ける。一日頭が痛む。強いて机に向って居ても、仕事ははかどらない。

四時には兄がふらっと帰って来る。而して母との衝突が予期のように来る。併しほんの二三言で、後に悲痛な沈黙が残る。一日、間違ひだらけな電話がかかる。頭は堪えられなく痛み、悪寒が背中から突きあたる。

悪魔の面は重く傾いて動かない。ストリンデルクの小気味よい、恐ろしい肖像が、一日の失はれた快適を追って、悩ましく悲しげである。

斯んな空気の中に生きて居るのは堪えられない。自分は、快い死を眠る為に、食事を終へると、すぐ床に就く。外には又々風にまじって雨の音がする。

二十一日

また――雪になって居る。午には止んで、後は半日寒く暗く湿っぽく曇って居る。

不性無精学校に行き、帰りに江波、木山と燕楽軒¹⁶¹⁾に行つて、土曜日の送別会の打合せをして来る。夕方家に帰ると、家には重い空気が漲ったまゝで居る。家中のものが気分の転換を求めて居るように、母と妹とが突然に琴をかき鳴らす。その間に、兄は浅ましく台所に行つて、焼酎を煽って居る。

荒んだ心で歌を歌ひ、憎しげに笑ふ。憎しみの世界が意地悪く晒って踊る。而して、第三者にまでも、悲しい憎しみの種を植ゑてゆく。こんな時にこそ、ボードレールの猫と蛇と悪魔と墓とは、不思議な慰の姿して、快い誘惑の目を涼しく瞞る。沈鐘のゲレスケケケは愚かメフィストさへも力なくうなだれる夜。

二十二日

学校から江波の処へ、再び学校へ、^{〔大夢〕}建昌先生の処へ、三角の処へ、江波の処へ、燕楽軒へ、^{〔西望〕}北村先生の処へ。曇日の泥濘道をかけまはり、頭も体もすっかり勞れて、十一時半家へかへる。

二十三日

久々でいっばいに窓を開いた心です
もうすっかり傾いた日が
樹々の枝間を縫って
お倉の壁に赤く遮られます
崖の下からは
^{〔素〕}
粗朴な楽みの声が響きます
猥らな唄が極めて暢気にうたはれ
彼等は今開け放した心で
町っ子らしい遊戯を遊戯して居ます
それが遠く遠く逝ってしまった
私の心の春であるように
滑らかな風は又
開いた窓口から、そっとそっと
(あゝ、それが決して一時の慰めや
底しれぬ偽りでないように！)
私の心の春を呼んで居ます、呼んで居ます。
^{〔欄外に記す〕}
〔湯地に手紙かく〕

二十四日

おゝ、悪意をそのまゝなる
予感よ
半日の僅かな間を
優しく訪れた春日は
悩ましい雪に押しやられ
子供達の率直な喜びが
素気なき沈黙に砕かれようとは！
其上寒い雪が小止みに止むと
おゝ、怒らましい曇日が
早くもびしょびしょと
汚らはしい染を撒きはじめる
悪意をそのまゝなる予感よ
それとも自分達には
明日を望むことすら
許されては居ないのか

それとも夢は朝毎に
覚めねばならないと云ふのか

〔×を附す〕

送別会后、研究生と江波、木山、三沢と飲み直し、更にパリーに行き、研究生と別れて後、銀座に走ってプランタンに行き、三時過ぎ、皆を引張って帰る。

二十五日

十時近くまで寝る。皆で家を出、市ヶ谷で江波、木山と別れ、三沢の処へ行く。而して、出なほして、井の頭に行く。池をぐるへ廻って後、踏切を越して街道を畠中を西荻窪まで歩いて、夕方家に帰る。

✓夕日かげ はつかに照れど 煙草もつ手の冷たさよ 汽車を待つ間の¹⁶²⁾
✓水鳥の 声さ渡りて この沼の 枯葉の葦の 静もりもあへる
✓おひしげり 水藻は揺れず 黒ずめる まだきにはやき 春の清水に
✓芝枯の 小道を行けば 芝枯の 春めきたれど 水ぐみたれど

二十六日

関口さん、小城の叔母様が来る。

またへ心がいらへして来る。静り返ってゐる田舎道を通つてすら、物干の赤が目につく。頭の中に、堪らない渦巻を感じる。人がいやになる。それでいて、人を求めて居る。そしてそれが、尚々自分を不快にする。時たま優しい気持ちに返る。其間に自分は、忙がしく仕事を続ける。併し其時でさへ、自分は生温い風に吹かれる生温い雨を頭に画いて居る。而して時をうつさず、梟と蝙蝠の使が迎へに来る。而してどんなに快いことよ！

一週間前に画いた自画像の予言が、斯くも早く導き出されようとは！おゝ、壁に粘^{〔貼〕}られた自分の横顔が、その引締めた厚い唇が、沈黙を透して雄弁に語り、一処をみつめた目が、誘惑を待つ心に雑多な罍を投げる。而して、夜は風が、風が唸を立て、暴れ狂ひ(何の相図か知らない)、胸の底に、けたたましい連鐘が鳴る。蒼白い月が照る。而して明日は？！

〔×を附す〕

道は道は
土をゆき土をゆき
野に出で山に登り

さて海の底に沈むのか
彼方の雲に続くのか

通りすがりにちらと見たものは
春の朝、水土の中に蠢く蛙
赤い花の根を堀る虻蛄^{〔堀〕}
岩間に仰ぎみた虹
さて沈黙と暗黒を守る山椒魚

恐れたものは 飽満と紫と寒さと
悲しんだものは 遇合^{〔会〕}と別離と
親しんだものは 刺と針と羞耻と
引かれたものは 総べて海底の異形
夢みたものは 汗と眩暈と夏の白雲と

そこで此の道が海に沈むならば
地獄^{〔獄〕}の快樂が自分を待つだらう
此の道が彼方の雲に登るならば
其処に善根の鷺と闘って
自分は勞れ仆れるにちがひない¹⁶³⁾

〔×を附す〕

二十七日

昨日の暴れ荒んだ風は、恐ろしい寒さを置きざりにして消え失せる。霜柱がぎら／＼と光り、夜は足下から背中から寒さが這ひ上り、降り注ぐ。千代子叔母様¹⁶⁴⁾が英昌をつれてくる。中井さんが来る。夜は音枝が来る。

二十八日

天気は晴々して寒い。終日頭が苛々して、事々に飽き、事々におびえる。くしゃみがとぶ、思が移る。馬鹿馬鹿しい日。もう寝よう。

三月

一日

^{〔松元〕}
泰彦兄。神経衰弱、憂鬱。何人殺し。曰く発狂。曰く自殺。近代人である自分達が、

全然与り知らないと済まして居る訳にはいかないが（自分達自身、何処かに幾分でも求めて居るとは云へ）、あまりに深刻、深刻って云はれると、少しは反抗してみたくなる。実を云へば、僕には近頃のこの重苦しさが堪えられなくなって来たのだ。誰か軽い気持ちを理解して呉れる人はいないか。

軽妙瀟洒、僕はここにも深刻と同じ価値を見出し度い。それが如何なる意味であつてもかまはない。我々は苦しむ為に生れて来た！此の世は悲しみの生活だ！僕はこれらを頭から否定しはしない。また実際、僕とても「此の世」に生きて居るのだ。而も僕はやはり一週間、笑はずには居られないのだ。それどころか三日に一度は、心から笑ひ得る心を求めて居る。

こんなことを書く僕の心は解って呉れるだらう。僕は幾日か、心から笑ったことがない。友達等とは口で喋ったり、顔で笑ったりするだけだし、家の空気は重々しい影を作っているのだ。僕は此の影の中心からは外れて居るから、此の方はあまり直接的な苦痛ではないけれど、やはり不快だ。若し暇があつたら、軽い言葉を送って欲しい。

〔〔欄外に記す〕松元に手紙を出す〕〔〔欄外に記す〕野間に手紙を書く〕

二日

余りに荒みはてた心を、余りに重苦しい心を、少しでも和らげ得るならば、少しでも鎮め得るならばと思つて、昨夜から今朝方にかけて、慎ましひ聖クララの伝記をあらまし読み通した。朝はしめやかな霞と共に明ける。而して透き徹った空気と輝かしい日と、なごやかな清風とがそれに次ぐ。お、それなのに、頭の中は似然として混然たるままで居る。否、新らしい悩ましさが更にも加はり、苦しめるのである。

ミゼレレと我が詩、ビザンチン磔刑像と自画像、花園の百合、堇、薔薇と我が薊、小鳥への説教及び慕はしい幾多の伝説と我が現実、それらが自分の心の中に雑然たる分裂を齎すからである。（併し此等の間に、自分は今僅かに或る暗示を見出し得る。）太陽の歌は自分にはあまりに苛酷であり、自らマーテンスを歌ひ喜ぶことも許されない。棕櫚の日¹⁶⁵⁾は自分が前から幾度か夢みた、又夢みる日である。而も自分の多重な性格が、日々はこの夢を遠く運んで行く。自分は自らの此の多重な性格に、今は圧倒せられて居る。自分は今、「俺にはその気持は解らないよ。それは俺の性格からはかけはなれたものだ」、と云ひ得る人を羨ますには居られない。而も、自分の私やかな自負が許されるならば、自分は此の棕櫚の日の遠いことを少しでも恐れはしない。又その完成を待つ為に、自分の多重の性格をも恐れはしない！

夕方から誘はれるまゝに、母と妹と三人で帝劇に行く。昼食を済ませた頃から、頭が馬鹿のようになって、永いこと縁側の日向に横はって、ものうい目を細く閉ぢて居る位

ひだったし、芝居も随分久しぶりだったからである。第一の断橋は、^{〔武郎〕}有島氏近年の駄作である。内容を盛るにあまりに専心した為に、舞台を全然動きのとれないものにしてしまふ。其上、随分小さな感じのものにしてしまふ。それは、一つには「或女」の印象から^{〔妨〕}防げられて居るのかも知れない。併し、^{〔守田〕}勘弥の不敵の努力によって、舞台はある所までひきしまつてゆく。あゝした言葉の芝居は、小劇場で演出することによって、もっともっとすべての観客の心を引き得るのではあるまいか。只、土間の一等客こそ観客であつて、他は問題でないと云はれれば、それまでではあるが。而も役者は皆よく演じた、立派に演じおほせたと云へる。

然らば、罪は当然作者に帰しても差支へあるまい。第二、神靈矢口渡は、^{〔尾上〕}栄三郎の一人役、それに^{〔大谷〕}勘弥、友右衛門の立派なおつき合ひによって、平凡ながらに舞台には隙を作らない。第三の保名は、可成期待にそむかれた。^{〔尾上〕}菊五郎の「うまさ」は充分認められながらも、尚あつけないものであつた。第四の息子は、最上の最上である。簡単な、そして完成された舞台が、内容にはまり込み、三人の役者の存分なアクトが内容を十二分に盛り出す。有島氏の作が、その哲学味の故に迎へられるなら、小山内氏の作は、その情味の故に人に迫る。前者が劇的效果を幾分、或は全く犠牲にしてまで内容を主張するのに対して、後者は完全な舞台効果の上に美しい情味を織り込んだと云へよう。哲学者、人道主義者は前者に屈服するとしても、芸術家と人間主義者は後者に魅了せられる。

兎も角も、自分は今迄にこれ程完全に演出された一幕を見たことがない。而して、自分はあまりに只大きな不完全——もっと悪いのは、殆ど醜態を屢々見せつけられる故に、此の小さな完全を此上なく喜ばしく思ふ。而して、此のつゝましい努力が案外に速く大きなものを拵へ上げる道であることを思ふ。

第五の俠客春雨傘は、熊谷守一さんの所謂「こんちわ」であり、めでたし、めでたしである。これは勿論、現今の観劇、劇全体としての劇の立場から云ふのであるが、その個々の技、部々の芸又意匠、振り、即ち役者本意の旧観劇の伝統から見ると（何故なら、劇自身がそれを基本として作られて居ると云つてもいい位なのだから）、問題は又別であり、譬へ普遍性を欠くとは云へ、特殊な立場を理解するものには、又特殊な味を味はしめるものである……。而し、いかなる芸術にすら、何等かの約束は有るのであるから、これは^{〔対〕}絶体に退け了はせ得べきではなく、寧ろ極端に類型化された伝統から自由になることによって、更に広いものにも成り得ると思はれる。

^{〔欄外に記す〕}[(旧劇の新解釈と演出法の要求について)、(保名の舞台面に就て)、(是等新らしい表現主義としての完成に就て)]

三日

自分は十日の苦情を一昨日、^{〔泰彦〕}松元の処へ訴へてやった。而して、是れは自分で作り上げた詩ではなかった。苛立たしくも、今日これが確実に裏書されたのである。

自分の頭は馬鹿になって居る！おゝ、笑ふべき自分よ！自分は今日、五円札が一枚に五十銭札が二枚で十二円だと信じたのである。其上八円の借金は、七円返すことによって正しく償はれると信じたのである。これは笑ひ事ではない。憐れな自分よ。午後から輝かしい空の下に、春の嵐が荒れ猛る。おゝ、快い嵐よ、鳴り呻く風よ、樹々は折れよ、埃は空にまで飛べ、お前等の憂鬱なる乱虐によって、此の頭の中に繚る総べてのものを捨て撒らしてくれ！而して明日の朝、水一色の蒼空の中に総べてのものを忘れしめて呉れ！

[×を附す]

観劇雑感続。一体総合芸術が、個々乃至部々に分裂する時は、当然本来の意義を失する。此の意味で、先日来た伊太利歌劇は、正に日本の旧劇に於けると同じ状態に在ると云へるであらう。自分は寧ろ、三年前、婦人驕風会の主催で帝劇に演出せられたるタンホイザーに、より自由な、より真実なる総合芸術の意義を認めるものである。まったく日本の旧劇から、役者の「づぬけた技巧」を取り去るならば、此度の伊太利歌劇から其れ自身として、単独な価値を存する「歌」を取り去るならば、何がそこに残るか。勿論自分は字義通り、こんなことを——役者のない劇、歌手のない歌劇を思へと云ふのではない。只自分は役者の技巧なり歌なりが、あまりに第一義的に働き過ぎてゐること。否、これらが益々上手であることは望ましいことではあるが、他のことども、一つの「劇」を造り上げて居る他の部分が、あまりになげやりにせられ、余りに顧られないことを難ずるのである。

これには観客にも半ばの罪を帰せねばならない。観客の多数は、「吉右衛門の梅の吉兵衛」を、「幸四郎の弁慶」を見にゆくのである。「アムプロゾのバターフライ」「ブルスカヤのミニョン」を聞きに行くのである。これは、観劇の一部ではある。併し、要するに一部である以上ではない。そして、興業師は、^{〔行〕}容意に^{〔易〕}観客の心理を知る。処でこれ^{〔服〕}があまりに当然なことであり、素人の陥り易き危険であることを知るならば、（少なくとも現下に於て）これを救ひ得るものは、舞台監督、役者、芸術家を措いては他にないのである。然らば芸術家は正しく、強くなければならない。芸術家にして観照者に屈腹することは、墮落の、汚辱の最たるものである。観照者を正しきに導き、正しき観照者を持つことは、芸術家の特権であり、義務でなければならない。

演劇の如き、管弦楽の如き総合芸術は、個々の個々としての活躍を許さない。然るに日本の旧劇は、舞台監督をもたない。日本の合奏が一人の指揮者を持たないように、ここに当然の結果として、個々を統一し、抑制すべきものとして、厳正なる類型が生れ出たのである。斯くて如何なる劇も、時代狂言、世話狂言、浄瑠璃物、能狂言と云った幾つかの類型の中に入れられて、自由の世界を持ち得ないことになる。

然るに同じ時代に於て、新劇の方では既に立派に舞台監督が認められて居るのである。而して、あらゆる戯曲があらゆる演出法を持って居るのである。伝統から踏み出るのは、なかなかの努力を要するではあらう。併し旧劇の俳優よ、旧劇鼎足の観客よ、覚めて適宜な舞台監督を求めよ。そこに幾多の道が開かれるであらう。おゝ、併しうっかりこれらの誰でもを引張って来てはいけない。若しそんなことをしたならば、君等の世界は、伝統はぶっつぶれてしまふ。君等はその尊い伝統をぶっつぶすようなことをしてかしてはならない。その伝統を更に正しく延長させることによって、君等の新しい道が開かれねばならない。西洋で最近に生れ出た表現主義の仕事を、君等は已に何百年前に行きかけて居たのだ。表現主義は決して三角や四角を用ゐなくても出来るのだ。君等は個々の表現に対しては、実に西洋にも見られない技巧を所有して居るのだ。只君らと等しく、その尊い伝統に理解と同情とを持つ人のうちから、新しい、立派な舞台監督を得て、君等の劇が自由の世界のうちに（類型から離れた全体的統一をめざすならば、立派な理解の上に立って、手あたり次第に法方^{〔方法〕}をあさって居る表現主義者よりも、寧ろ容易に立派な表現芸術を生み出すことが出来るだらう。

五日

『生れたと云ふことは「死ぬべき」ことを予想して居る』

さなきだに寂しい「事実」に

何故に聖なる聖者仏陀は

斯くも酷く裏書せられるか

私は、かうしてふらへ〜と生きてゆく私は

そして何処かで運命に甘へてゐる私は

「生れた」ことと「死ぬべき」こととの相関を

斯んなふう^{〔方法〕}に切実に身に覚えたことがない

而も殉情の、弱い私の前に

これは、私が此の上なく寂しむ事実

而もなほ、能ふかぎり甘へてみやう事実を

決して揺がない「事実」

事実を何処までも主張する「事実」として

私の悲しい諦にまで、私を導く――

遇ったと云ふことは「別るべき」ことを予想してゐる！

〔×を附す〕

六日

昨日の諦は嘘だ。否、昨日は本当だったのだ。然し今は嘘だ。事実なんて云ふ客観が

何処まで根強くても、自分の主観は容易にそれに打勝って見せよう。自分はこれを説明するのは、極少ない言葉で沢山だ。

「パロミデスさま」

「アラディン」

「パロミデス——」

「アラ——ディン——」

ね、これで沢山だ。アラディンとパロミデスにとって、死が何であったか、又、少年アマルが彼の小さな心の中で、「事実」を何んなに征服して了ったか

七日

日は暖かく、風はやゝ冷たく

久々に閑かに優しい気持ちにかへる

乾枯びた鉢の根に丁寧に水を撒き

伸び伸びた髯をさっぱりとそってみる。

夕方から、小石川に行く。小石川では、叔母様がぼつねんと座って

敬太¹⁶⁶⁾を遊ばせて居る

敬太は自分を珍らしがって

有るだけの頑具^{〔玩〕}を出して来て

まはらぬ口で怪しげなお喋りを続ける

夢中になって遊び過ごした敬太は

何時のまにかおもらしをして了って

可愛らしくあやまって居る

これも亦久々で

叔母様と向ひあって食卓につく

それから 昔の 今の

外国の 日本の

伝統の 革命の話が広がって行くうちに

よいほどに しんみりと

春の夜が更けていって

食後のバナナの匂に溶けて

叔母様の「夢」が涙ぐみ

紫の煙草の烟に

叔母様の「観音様」が仄仄^{むせ}に優んで浮ぶ

『「夢」と「観音様」は、叔母様の衷なる、未だ果たされぬ、ひめやかな感謝の奉仕なのです』

八日

小雨降るとしもなく
たそがれの庭の小隅に
色づきし
去年の落葉かな
濡葉かな

〔×を附す〕

×

春来ると
小雨に濡るゝ去年の落葉
赤らかに色ぐむ落葉
そのひまに八手の子
八手の子
緑互えにけり燃えにけり

〔×を附す〕

×

さらさらと聞きあへねども
さらさらと目には見えたり
笹の葉のささ揺り揺りて
窓の辺に
顔に手に
小雨吹く春の宵風

〔×を附す〕

自分は今日電車の中で、一人のお婆さんが、彼女の切なさな^{〔溜〕}留息と共にき出した言葉を聞いた。「ない子では泣かないが、ある子に泣くってね」。お婆さんは、ぜゝきたない身なりをして、黒いしわだらけな顔は、殆ど滑稽な程に醜く悲惨であった。而も、こうした人の屑とも思はれ易い人の口から、若い者をもしみへごとさせるような、豊かに人間味の盛られた言葉を聞くことは、全くまゝあることである。而して自分は今日一日、亡き姉を思ったのである。

自分は姉を見知る筈がない。何故なら、姉が亡くなったのは、自分が生れたのより遅くはないのである。自分はその全く知らない姉に対して、いつも思ひ出す度に、二つの概念の矛盾に気付く。即ち一つは、常に「三才の赤子の姿」であり、一つは、まがひもなき自分の「姉」であるからである。而もこれすらが自分にはひそかな哀惜である。何

故ならば、自分にも確かに姉が居たのである。はじめからない姉ではない。ある筈の、
或はあるべき姉である。其上、釣り落した魚はいつでも大きい。自分は甲斐もなく、二
年前、同じ様な小雨の一日、亡き姉の小さな墓を訪ねたことを思ふ。其時の歌をも。

三才の姿の

姉を思ふなり

ちいさき墓に冬の雨降る

九日

降るともなく、晴れるともなく、煩はしい日がのろ／＼と過ぎて、夕方何うやら雲を
追ひのけて黄色い太陽が照っても——おゝ、自分は朝から机に向ったまゝで、何もしな
い。何も出来ない。斯うして自分は間もなく本当の馬鹿か、よくいって狂気にまで押し
やられて行くやうな気がする。毎日とりとめもないことを敢へて書くのも、まだ自分の
心がまだ僅かに、或る時々、過ぎた日や、来る日の中に甦ることがあり、又それらに
対して、何故ともない慕はしさを持って居るからである。

十日

雑草よ

お前はこんな虫のいい私の願ひを聞いてくれるだらうか

私はお前を憎んで居るのだ

私は私の小さな鉢の花

チューリップとヒアシンスと紅白の梅と木瓜と棕櫚の芽生とを

かぎりなく愛して居るのだ

そこで私は私の鉢の土が乾枯びないやうに

気をつけて水をやり

時々見まはって若しもお前を見付けるなら

直ぐにむしり取って捨てる

何故と云って、若しもお前がそのまま大きくなって

そこに花を咲かせ

そこにむやみに実を撒かれてはたまらないからね

私には時々私の鉢を見まはって

今日は赤い木瓜の芽がほんの少しばかり開いて

中から青葉の子供がのぞきみして居たとか

今度は紅い梅が一つ咲き殖えたとか

今にこの土がきっと二所蟻の山程にもり上って

其処からチューリップの新らしい緑が

元気のいい顔を擡げるにちがひないと
そんな風に考へながら、でしゃばりなお前達を
見通がさないやうにすることが
此の上もない悦びなのだ
ね、私は私の小さな鉢の花を
限りなく愛して居るのだよ、

雑草よ
お前はこんな虫のいい私の願を許して呉れるだらうか
私は私の小さな鉢の花を
限りなく愛して居る
だが若しもそこには程よく雨が降って
小さな土は決して乾枯びるようなことがなく
若しもほんの少しばかりでも
お前のような邪魔者がなくて
私の小さな鉢の花達が安心してそこに美しい花を開き
私の手ががらあきになってしまひ
私の見廻りが何の意味をも持たなくなってしまったなら
おゝ、それでも私は私の小さな鉢の花を
限りなく愛して居るだらうか
それとも私の愛は
私がこれ程にも私の花を愛して居ると云ふ意識は
何んなにか恐ろしく奪ひ去られて了ふのだらうか
何故と云って偶然そこに立止った私が
ふふん、暫らく見ない間にこんなになって居たのか
今度は大分沢山に花が咲いたな
だが私とはたいした関係もないようだ
斯んな風に思ふようなことが決してないだらうか
而して私は、私が時々水をやる為に小さな土が乾枯びたり
私がむしりにとってやる為に、お前がのさばり出たりしたことを
懐かしく思ふようなことが決してないだらうか
ね、私はまあそんな程度で
お前をも愛して居るのだよ¹⁶⁷⁾

〔×を附す〕

午後、弟と帝劇のマチネーに行く。ブルメスターの音楽会である。ベートーヴェンのソナタの第二・第三楽章、アダチオとロンド、メンデルスゾーンのコンチェルトの第二楽章1のアンダンテは、限りなく美しい。最後の五つの小曲は、あまりに技巧的である（僭越なことだが）ように思はれる。兎も角ブルメスターは、^{〔異〕}驚畏の一人である。今迄聞いた沢山の人々、エルマン、チンバリスト、ピアストロ、パーロー、（アイヒハイムは幾分劣ったとしても、又美しい他の道を持って居た）等とは全然異った道を進んで居るだけに、一寸比較を許さない。例へば後者等が、若さと熱情とを赤裸々に奏で出す様が、烈風に火焰が煽られるに似るならば（チンバリストは、中では一人ちみな道を行くようだが、技巧の点だけでも、前者とは全く異って居る）、前者は百年の風雨に堪えて静かに立つ檜の大木のように、内に力を潜めて居る。兎も角、正統な道を正統にふんで、一曲の一言にすら周到な注意がはらはれて居るのが嬉しい。（或意味では、理智が勝って居るとさへ見える）。

幕が上って、ブルメスターが出て来た時は、実にあまりの驚きであった。巨匠ブルメスターは、細面な七呎もあらうと思はれる長い長い体を二本の杖にもたれて、ぎこちなく舞台に運ぶのである。長い頭はすっかり禿げて輝いて居る。強い目と眉の間には、悲惨な微笑がきざまれてゐる。長い胴と長い脚とは、ものさしの様に堅くぎこちない。そしてそのステッキ！自分は三日前に兄と三宅坂まで散歩をした。出る時から風が冷たかったが、三宅坂から真直ぐ帰って来る頃には、ひどい北風が灰色の埃を押し流し巻き上げて居た。其時、向ふから一人の西洋婦人、紫小豆の服をつけた、あまり上品らしくない婦人が、彼女の腕に二本の全く同じ杖をかけて来たのである。自分達は其杖について、偶然にもくだらない想像をしたのである。自分は其の二本の杖の先が、同じように円く革で包んであるのに気づいたのである。「あれは確かにある不具の人にたのまれて、今買って来たところなんだよ」。

ところが今、ブルメスターの体を支へる杖は、正しく其の二本の杖なのである。そのぎこちない傀儡の如な体でどんな音が奏でられたか、透通るような軽快さはそこにはない。併し幾分堅い、サビのある、実に落着いた音である。そしてまるで、体全体には不似合に、手頸から指にかけては、此上なく柔らかに働く。そしてこの老人が、さながら円熟せる古典そのものの如な演奏の中に、芸術家らしく全く若々しく、酔ひきって了ふのである。それは実に、独逸古典の極致である。現下の日本の音楽学校が、全々独逸から系統を引いて居るだけに、自分達ははじめて現はれた、この「独逸」を案外容易に理解し、同情することが出来る。

（文ちゃんに手紙を書く）

十二日

昨日から降り出した雨が、煙るようにじめじめと黙りこくって降り続ける。三時には雨が止んだが、生温い沈黙は愈々自分を不快にする。何でもないようなことが容易に自分を捕へ、不躰に頭にこびりついてはなれない。反抗すれば、それだけ自分の頭の中は、雑然と乱れるだけである。自分は敢へて無関心である為に、あらゆる刺戟を求めた。古代美術史、タンタジールの死、白蓮の詩(これは最も自分を不快にする)。ペンと原稿用紙、茶、そして散歩！

而して、あらゆるものに失敗してしまふ。併し自分も容易には屈服しない。次には気まぐれ、変態心理！而して一日は他愛もなく暮れてしまふ。夜は更に静かである。明日は天気であるなら、鎌倉に行かう。人のない浜と水と思出とは、自分を何うにかして呉れるだらう。猶いけないならば、自分は茅ヶ崎の父の許に走る。

終日、黙りこくって、黙りこくって
大地はじめじめと濡れ
机上の白布も、ペンも、絵具も
煙草の煙も、すべて身を繞るものらは
黙りこくって、黙りこくって
本箱にぎっしりつまった本も
今日一日、一つの言葉すら囁かない
目に見える赤も緑も、灰色も水も
無言の声すら伝へず
過去の追憶も、思想も
何の響すら立てない、曇日！
曇日、曇日！

おゝ、誰か沈黙を破るものがある
聞け、小気味よいあのをらびを！^{〔叫〕}
赤んぼが泣く
のけぞりかかへって泣く
火のように風のように泣く
赤んぼが泣く、おらぶ^{〔叫〕}
畳を襖を、母の膝を蹴って
泣く、おらぶ^{〔叫〕}
髪を胸を、湿った空気をむしって

泣く、おらぶ^{〔叫〕}
赤んぼは怒る
幼児の特権を以て、幼児の使命を以て
母の為に、人々の為に
この沈黙を、暗い雲を、怒る
赤んぼは怒る
のけぞりかへって泣く、をらぶ^{〔叫〕}！

おゝ、身が震ふ
衷なる怒が燃える
悪魔めく喜びの心が笑ふ
おゝ、大気はゆるげ
机上の白布は、ペンは
すべて身を繞るものら
樹々も、塵も、赤も黄も
赤んぼの怒りを見るものは
赤んぼのをらび^{〔叫〕}を聞くものは
すべて皆立て！
立って怒れ、立ってをらべ^{〔叫〕}
泣け！
おゝ、自分は救はれる――

〔×を附す〕

十三日

日暮に鎌倉に来る。直ぐ梅子叔母様の処へ行く。昌道と百合子の喜びで、先づ心が和らげられる。綾子¹⁶⁸⁾までが人見知りもせず、片言を語って笑ふ。八時半に昌道と百合子を床に就けて山に来る。茲にも喜びが待つて居る。

十四日

冷たい冷たい風が終日吹いて居る。日は美しく輝いて、穏かな穏かな、併し何ともない日が過ぎる。永くは堪えられまい。併し自分には珍らしい気持である。斯うして、何ともない日が二日三日過ぎて、何ともある日が来れば、自分は鎌倉に来たことを有難く思ふだらう。

日なたぼっこをしながら、鶏の足の蟲を洗って薬をぬり込んでやる。ふところ手して、漸く芽生へかけた花壇の草草を、訳もなくみつめて歩く。芝山でアンネとトスとに一寸

からかって見る。夕食は、梅子叔母様と子供達と皆で賑やかに食べる。北方の神話は南方のそれよりも色々な意味で興味深く、夕食後、十時半に床につくまでの間を、祖父様とお互に相手になり合ひっこをして、先づいらへもせず、先づ退屈もせずに過すことが出来る。

床に就いてから、一時間程も本を読んで居ると、ひっそりと静まりかへった夜の気を揺がして、遠くの方から夜廻りのシャク杖の音が響いて来る。其の音は思ったより近かったと見えて、ぢきに蛇苦死様¹⁶⁹へ行く暗い石段を昇って、家の門の中まで入って来る。而していつでもやって行くように、玄関の前の輔石の処でジャンジャンへへと烈くシャク杖を突き鳴らして、又石段を降りて元来た道の方に帰って行く。だんへだんへ遠くシャリンへと幽かになって行く。小さい時分には、夜中に目が覚めて、あの音を聞くのが何だか恐ろしいようないやな気がした事を思ひ出す。はたの誰彼がすやへと寝入って居る時に、真夜中に一人目が覚めて居ると云ふことだけでも、充分何となく恐ろしいような気がしたし、其上あの音は小さい自分達には、まるで「寂しい真夜中」と云ふものの化身でもあるようにさへ思はれたからである。而して、何故今こんなことを思ひ出すのだらう。今自分の頭の中には、癲狂院¹⁷⁰の医師と患者との不思議な世界と、北方神話のまるで遠い作り噺の様な、それで居てチョッチョッと現実的なところに立かへって来る——そして、そこからまるであり得ないことが、極めてあり得る処に築かれる為に、その神秘が不自然ながらに、ひどく強い感じを以て迫って来るような世界とが、奇妙に錯雑して居るのである。而も癲狂院の手記は、決して自分からは遠い離れたものではなくて、案外に近い所に現実味を豊富に持って開展して居るのである。

而して、本物か或は偽者が今も尚（多分本物にちがひない）遠くへ幽かにへ、まだ消えきらないシャリンシャリンが耳の奥に這ひ寄って来る。

十五日

朝から、暗い空から音も立てず小雨が降り続ける。それは春雨と呼べるようなものでは決してない。ほんの少しばかりの風が、終日冷たい空気を揺がす。小さな鎌倉の町が、ほんの前の庭をのぞいては、何処も此処も霞んで、海は空と一つになってしまう。夕方雨が止んで、黄色い弱々しい日が二階の縁側に射し込む。けれどこれも、たいした信用を置けるようなものでは決してない。

人も来なければ、外にも出ない。広家の中で時たま往き合ふのは祖父一人で、今日はまたお互に退屈がって過ぎてゆく。

十六日

晴れ！朝から湯地の処へ行く。まだ帰って来て居ないので、梅子叔母様の処へ行く。

午後は子供達もつれて扇州園¹⁷¹⁾に出かける。朗かな日が勢よく芽出した小さな草花の葉を光らせる。真夏のような硝子張りの幾つかの温室の中には、見事なシクラメン、チューリップ、スキートピー、フリージア、其他、名もしらない美しい花が咲き競って居る。

其中に、黄瓜の花もまじり、珍らしいメロンがオレンジ程になって、青く重げに下って居る。町には田舎娘等が、ぞろ／＼とふしだらな塊となって、あっちにもこっちにも、べちゃ／＼喋りながら歩いて居る。その暢気な無識らしい顔付も、今日の自分の心には可愛らしい。尚、扇州園の日当りのいい広い花園に、半ズボンに薄いシャツの軽々しい姿をした花造り等が、忙がしげに土に親しんで居るのも、彼等が黒々と元気さうな顔付きを見るのも、羨ましい程快い。夕方山に帰った頃には、海は輝かしい夕日を映して、静かに光って居る。

見下す町々に、薄紫の煙が風もないので真直ぐに高く幾筋か昇るのも、春の夕暮らしい。一日活快な心だった。何等の苛々しさも、何等の感傷もない。詩もない程に、何一つ跡に残るようなものがない。そんなに軽快な浸りきった心である。

十七日

朝と夕方と二度、妙本寺の境内を散歩する。境内はいつものように人影もなく、静かである。古杉の森に囲まれた台地には、榊の花が独り高く香り、藪の中には藪雀がないしよ話しのようには囁き合ふ。道哉の墓に詣でて、立ってあたりを見まはすと、誠に其処は、死者の住所に応はしく思はれる。

八百年の苔むした小さな石碑が、十ば一からげと云ふように、ぎっしりと並んで居る。それらは永い間の雨にさらされて、角はとれ、石自身も何となくぼろ／＼のものの塊のように思はれる。其間に、処々新しい生々しい墓表と「経回…」の木札〔標〕が無雑作〔造〕にたてかけられてある。それでも、そここの墓石の前には、梅、水仙などの花が手向けられて居る。何時来ても人影もないのに、何時来ても小さな平地は、綺麗に掃き清められて居る。そこに、処〔狭〕狭く、仲よく並んだ、「…居士」「…信女」の中には、此の古寺の幾多の盛衰の間に生きた、敬虔な佛の奴も居るだらう。此世に生き永らへた間、欲に欺かれ、人々に嫌忌された人々も居るだらう。中には、「海軍大佐…」「…家累代之墓」など、新たしく刻まれた石の主もある。けれども、是等ととも、今生くる人々の僅かな慰めより以上、何の意義もなく、ほんの幾代かの後には、他の石ころと同じように、静かな魂の住家となることだらう。

のたれ死にに死んだものも、華やかな葬列〔ママ〕に送られて眠ったものも、皆変ることなく、一つ魂となってここに横はるのである。

この幾多の魂に取り囲まれて、人は静かな、爽やかな心に導かれる。恨も妬みも、すべてはその前に、寂しい暖かい一つ心になる。栄華も窮亡〔乏〕も、すべてはその前に、静か

に豊かな一つ心になるのである。

「誰人か此の世に生れたもので、誰一人よくない人が居たと云へるものがあるか」と。

朝から一日、重く曇って居た空が、日暮前一時晴れやかに色づいて、橙朱の霞んだ日が、樹々を屋根を飾る。

十八日 sunday

欺かれて、欺かれて、五日目の朝は、悩ましくたゆたふ雲と生温い風にあける。夜中降り続けたらしく、木も屋根も土も重く濡れて居る。而して自分も、もう今度は茅ヶ崎へ行くことを止める。十時半、梅子叔母様の処へ行った頃には、日が輝やかしく南風が荒らび吹いて居たが、午に又も雲が寄せて

十九日

昨日は茲まで書きかけて、もうめいりさうに寂しくなつて了つたので、まだ七時半を少し過ぎたばかりだったが、こそこそと寢床に入つて了つた。で今、自分は続きを書かなければならないが、気持はまるで違つて了つて居る。今、朝の八時、外には雨がびしょ〜と降って居る。そして昨日、帰って来てよかったと思ひ、こんなことなら帰つて来ることもなかったと思ふ。何故なら、今日は朝から動坂へ行つて、学校に寄つて、それから倉沢の処へ行つて、などと思つて居たからである。処で、昨日の午後は、嵐めいた生温い風のまにまに、輝かしい日と泣き出しそうな雲とが、来たり隠れたりして居た。二時頃の汽車で、自分は東京に帰つて来て了つたのである。汽車はひどくこんで居た。花見の帰りらしい男女の団体が、そこでもここでも、あたりかまはず大きな声で皆を笑はせ、其間、むしゃ〜と何かを食ひづめに食つて、皮やら紙やらを、あたりかまはず投げ散らす。

汽車の中は暑かった。そして自分は目を眠るようにして、次から次に来る、様々な勝手な考へやら思ひやらに身を任せて居た。而して、暗くなると共に、ぱら〜と雨が降り出した……

序として（自分の詩の）

私は何よりもひどく天候に支配されるようです。併し或る人々のように、まだ床の中に居る時から、其日の天候を直感し得るような、生理的な感受性から来るものではないようです。私が朝起き出て、其日の天候に挨拶をする時、其の一瞬に私の心は、天候の指示通りに服従させられて了ふようです。

私は大変に気まぐれようです

（私は気まぐれと云ふ意味を確かには知りませんが）

この意味は、斯うなのです

例へば対自然に就いて少し説明して見ませう

或時、自然は私に対して、それは親切で、それは有難く、美しく思はれます

そして私は真心から自然を慕ひ、自然を敬ひ、快く自然に抱かれて喜び、甘へます

ほんの次の瞬間に、私は自然を呪ってやります

断然、自然に反抗してやると心に誓ひます

私は跳いたり引掻いたりして、自然から離れようとしします

其時自然は私の唯一の敵であり、反逆者なのです

即ち或時、自然は私の愛の対象であり、次の瞬間には、憎しみの対象です

或時、自然は神であり、次の瞬間に、それは悪魔よりも悪いものです

そこで斯ういふ結論に達します

自然は神ではない。悪魔でもなく、やはり自然そのまゝである

そして斯くても、私は大変に気まぐれのようなのです

〔×を附す〕

二十日

雨、後止む。けれど、雲は少しでも動かうとはせず、其のまゝ日が暮れる。一日机に座って居たので、夕食後、ぶら／＼外へ出る。

田辺サンに行つて、十時過ぎまで話しこんで帰る。

夜はまだ十時といふのに

街には火影もまばらに

人もゆかず

ひっそりと静まりかへり

煙草屋の店先に

爺さんは幽かに頭を光らせて

ごくりごくりまどろんで居る

三階建のカフェーの

ずらっと並んだ窓々から

レースのカーテンを透かせて

明るい電燈が虚しく燃えて居る

夜はまだ十時と云ふのに

〔×を附す〕

✓夜はいまだ十時といふに 街ゆけばあかしほのほの 静もりにけり
 ✓まだ萌えぬ いてふ若木の並木なす 枝穂立つなり 街のあかしに
 ✓空低う 星かげもなく 街の夜は 静もりにけり 家に帰ると
 ✓家並の ^{いへなみ} 門のあかしの ^{かど} まろまろと 霞むころなり 春来るとなり

二十一日

型式と内容について、ふっと考へることがある。

自分の淋しさや、やるせなさは、よく和歌を生み出し易い。自分は多からぬ自分の作を読んで居て思ふ。若しかして、これをだれかが見て、自分と云ふものを心に画いたなら! とんでもない! だがこれを確然と説明する為の準備もなし、又、ひどく長くなりさうでもあるので、時々断片的に書くことにする。

早昼で、兄と松屋に行く。^(量世)倉沢から信州の人々の或る同人展覧会に招待されて居たからである。併し、会は可成雑然たる感じのもので、快いものではなかった。三越にも行く。三越のギャラリーでは、郷土画展覧会と云ふのがあった。人が多いので、一々は見なかったけれど、大変に好きなのが二、三枚目についた。

銀座にも行った。日本橋から銀座まで歩いてゆく間の雑踏は、自分には近頃珍らしいものだった。風もないのに、其処らには一面に埃が立ちこめて、日の光が黄色く沢を失って居る。アスファルトを焼く臭ひが堪えられない、いやな気持ちを起させる。

ロシヤでお茶を飲んで、新橋から目黒に行く。同じように霞んでは居ても、日は暖かく閑かだった。目黒の高台から、森の間にちらばった赤い屋根、新しい家を見下した時は、追に心がくつろいだ。いちご園をぬけ、祐天寺の墓地と杉の木の中を通して田舎らしい道を少し歩くと、麦は五、六寸程にものびて、黒い牛がのろゝと歩くのにも会った。小城さんに行き、夜十時に帰る。

二十二日

八時に家を出て学校に行く。門脇氏¹⁷²⁾に逢って、一緒に門脇氏の居る七軒町¹⁷³⁾の三笠ハウスと云ふ処に行く。白壁は染色に褪せて、大きなひびが入って、今にも崩れて落ちるかと思はれる。左手の方に小さな入口があって、入るとすぐに、きたならしい階段がある。下駄ばきのまゝ、此の暗い階段を三階まで上ると、真暗な廊下の両側に三尺のひらきがむき合って居る。

一番奥まった左側の扉が、門脇氏の処だった。奥まった開きの前の三尺四方の板の間^(ママ)が台臺所で、小さなセリンが三つばかり並んで居る。向側の鼻先では、中年のお上さんが、三階の暗い廊下に大きな盥をすゑこんで洗濯をして居る。側には一人の婆さんが赤

んぼを背負って、何かお上さんに話しかけて居る。門脇氏は、これらの人に挨拶をして、自分の室に^{〔導〕}道いた。六畳ほどの古い室で、前に一間ほどの窓が開いて居て、上野の山が見える。右の方には赤んぼのふとんが伸べたまゝになって居り、左手に渡された竿には、小供の赤黒い着物や手拭などがずらっとかかって居る。其処で番茶を飲んで、色んな話しをした。「乞食を三日するとやめられないって云ひますがね、僕もここに居ると金がかからないので、而して余った金を皆な飲んでしまふんです。」実際、門脇氏は、一度に十円二十円の金を飲んでしまふことが、度々あるらしい。

上野で門脇氏に別れて笹塚に行く。夜九時帰る。五時頃から雨が降ったり止んだりして居る。

君ちゃん。今日あなたは何故あんなに僕を引き留めたのですか。而して、何故又僕は、あんなにあなたにさからって帰らうとしたのですか。自分でも解らずに、それでも只無性に帰らうとして、何をだか解りませんが、すっかり喋ってしまはうとして、出鱈目なことを出鱈目に喋り続けましたね。併しあなたも又、只話しつづけて居なければならぬように、とりとめもないことをとりとめもなく喋り続けましたね。それでも、とう／＼お暇して電車道に行かないうちに、又宇多ちゃん達に逢ってしまひました。そして、又留められるのを無理に帰って来ました。家の近所で、こんどは兄に逢ひました。兄は、道ちゃん、澄ちゃん、増子ちゃん、もと子ちゃんをつれて、小城さんに帰る所でした。皆は、家に三時から遊びに来て居たのですって。ですが、それが何でせう。僕はあなたの処で長いこと喋って居て、充分よい時を過したのですからね。家へかへりついたら、家では妹が一人で床をのべて居ましたよ。母は昼前から鎌倉に行つて、帰らないのでした。で僕は今になって、僕の帰りがあまり遅過ぎなかったことをよかつたと思ひます。

二十三日

午後、弟と笹塚に行く。夕方帰る。兄は工科¹⁷⁾の試験にパスして喜んで居る。

それゆゑ

私は、丁度太陽が沈まうとするので

合掌して

黒い海に祈つたのである

決してさんらんたる光の中に

彼等を見ない為に

彼等にみつからない為に

——おゝ、衰へて骸の様な身に

尚、媚を残すほど浅ましいものはない

それゆゑ

私は、今、太陽が半ば沈んだので

礼拝して

黒い水に誓ったのである

決して再び、私は

彼女を見ないだらうし

彼女を心に思はないだらう

——おゝ、ふくよかな胸に置かれた

十字の跡ほど痛ましいものはない

おゝ、それゆゑ

私は、遂に太陽が沈んで了ったので

顧みて——

ふとそなたの瞳にゆき遇うたのである

見もしらぬそなたではあるけれども——

(おゝ、私は欺かれたのか

それとも正しいのか)

そなたはもしや彼等ではないのか

そなたはもしや彼女ではないのか

おゝ、ためらはないでくれ

私はそなたが、そなた自身であることを

決して彼等でも彼女でもないことを

きっぱりと知り度い……

だが、太陽は既に遠く沈み

黒い海は死のように黙ってゐる！

〔×を附す〕

✓ほとほとに淋しうなりぬ明日よりは旅寝の身とも人ゆ離らむ

二十四日

一日家に居て、からっぽの心

兄が出て、弟が出て、母と妹が出て、よい夜が来る

より添ふように
近々と風が吹けば
さもいたいたしげに
顔をそむけてうなだれるくせに

風が行ってしまふと
のび上りのび上り
彼を見慕ひ
我をみせびらかす、園の小花の

〔×を附す〕

二十五日

朝のうち、上原さんに行き、学校に行き卒業製作展を見、江波の処へ行く。

一日苛々^{〔漠〕}して居る。莫然たる何かが次から次へ、裏切られ裏切られる。Aにつかまる、Bに引張られる、Cに留められる、Dに挨拶される。まるで自分と云ふものが、崩れかかって来るように思はれる。体は重く、頭は傾き、血は濁ってしまふ。併しEが僅かに自分を常規に引戻してはくれる。而も堪えられないのはF! Fは、此上なく美しく微笑む。Fは、此上なく優しく招く。Fは、此上なく可憐な瞳を送る。蠱惑を投げる。許されない望を望ませるFは、何と云ふ残忍だらう。だがその瞳は何と可憐だらう。その微笑は何と甘いだらう。その「招き」は、何と優しく、何と辛いことだらう。その蠱惑は何と快く、堪えられないことだらう。而もFは、此上なく優しく招く。その赤い小さい唇は、声なき言葉を、見えぬ息を送り、微笑は、瞳は、更に「招き」は、自分を捕へ、自分を導き、自分を狂はせ、自分を鞭ち、空虚な望を望ませる。それ故、自分は俯く、自分は逃れる、自分は走り避ける。やっとのことでFから遁れた自分は、その瞳に、頬に、眉に確りと押へられて居る!

頭がくらくらする。目がまふ、心が爛れる! 残忍な、惨酷な、此上なく優しいF!

二十六日

昨夜の錯覚は、夜半になって、生理的に自分を苛みはじめた。何の幻覚をも伴はなかったとは云へ、自分はひどく寝苦しくて醒めたのである。寝汗をびっしょりかいて、頭は空虚に覚めながら、眼の心がジンジン痛む。隣の室で兄と弟の声が聞える。それは、独逸の或る婦人から、もう四年も前に亡くなった自分等の父にあてて来た手紙に就いてだった。自分は聞くともなく終まで聞いて居た。其婦人は、父が独逸に行って居た頃の

知合らしい。あなたから最後に手紙を貰ったのが、千九百十四年だったと云って居る。其後、世界の大戦がはじまって、手紙の往復も絶えたものらしい。彼女は色々なことを思ひ出して居るらしい。而して其後の独逸の生活状態の激変については、半ポンドのバターが七乃至八千マーク、玉子が四千マークすると云って居る。アンナは洗濯婦になって働らいて居ると。其他、突然に叔父が死んでしまったこと、相続すべき遺産をごまかされたらしいこと、当時父と一緒に居た日本人の人々を思ひ出して居ることなどが、長く長く書かれて居る。

それでも彼女等は生きて居り、自分の父が四年前に亡くなったことも知らないのである。

それから、自分は体温器を出して、熱をとって見る。併し、熱は別にない。^{〔ママ〕}併し眠られないことは同じことだった。夜半中まどろんだり、醒めたり、種々な夢がちぎれへに何等の聯続も関係もなく、現はれたり、消えたりした。而して、朝方になって、ほんの少しばかりぐっすり寝たらしい。

朝から母と松屋に行く。松屋で倉沢に逢ひ、母と別れて甘露寺¹⁷⁵⁾の処へ行く。^{〔寺説〕}(甘露寺が昨日訪ねて呉れたからである)。甘露寺は葉山に行つて留守だったので、そのまゝ家に帰る。

二十七日

霞に明け、暖かい日がたける頃から、風埃が嵐めき、夜は蒼白い月がおぼろに照る。午に倉沢が来、夜九時前まで遊んで行く。

「永遠ならざるものは愛するに及ばず」

聖者は斯んなことを云ひました

では私達も声高く歌はう

明日消ゆべき此の春と春の心を

永遠にまで、結びつける為に

〔×を附す〕

二十八日

快晴、風強し。午後、弟と京王電車にて、多摩河原に行く。

✓遠く見る 榊林のほのかにも 緑ぐみたり 降る春の陽に

✓うららうらら 多摩の流の 石床の青ずみ深し 風稍烈し
✓春雲雀 多摩の河原の 蒼空に 歌ひ止まらずも 声のみにして
✓春風の 止まらずも渡り 渡る見ゆ 麦七寸の 畑面をかも



風景スケッチ（多摩河原の風景）

三十日

十一時頃、甘露寺の処へ行く。朝から曇って、今にも降るかと思はれた空が、其頃から晴れて、霞んだ雲間から、春のうちでも春らしい、柔らかに暖かい陽がのぞく。甘露寺には二年ぶり程で逢ったが、少しも変らない。自分が行ったことを、非常に喜んで呉れる。久々で一緒に食事をして、一時過ぎ帰る。その足で本所の倉沢の処へ行く。倉沢は留守で、家は戸が締って居た。が開けて中へ入って見ると、向ひの窓の処だけが戸が閉めてないので、折からの夕方前の陽が赤らんで障子にうつって居る。小さな室は小じんまりと片づけられて、本台の上には、大きな素焼の瓶に猫柳が無雑作に投げこまれて居る。而して、自分は猫柳と云ふ名前を何うしても思ひ出すことが出来なかった。で机に向って手帖を破いて、色んなことを書いて居る間に、次のようなことを書いた。「この猫の糞の様な花だか実だかは何だったかな。何でも鼠に関係した名前だったような気がするが、今何うしても思ひ出さない。僕は此の花を見て居ると、いつでも遠い子供の時分のことを思ひ出すが、何故だかは解らない。而して、今もこんなことを考へて居る。此の僕が十五年も前の幼い子供になって居る。而して、もう一人綺麗な紫の被風を着た同じ年頃の女の子が居る。二人は暖かい崖下の原っぱで、この花を一つ一つむしって居

る。いくらむしっても、其中からは、何にも出て来ない。何にも出ないことを知って居ながら、二人は尚次次にそれをむしって居る。而して知って居ながらも、まるでそれが見たい不思議でもあるように、二人は『何も出ない』と云っては、嬉しさうに笑ひ合ふ。ね、子供ってそんな風にするのが、大好きなものですね……」

〔×を附す〕

三十一日

朗らかなよい日を一日、家にとちこもって居ると、午後、文ちゃんが来た。夜になったので、送りながら小城さんへ行行って宿る。

まだ春の夜は宵なのに
田舎道を通る人も稀でした
二人は黙りこくって
又時折小さな声で話しながら
(何故ならあたりはあまりに静かでした)
遠い道をゆっくりゆっくり歩きました
空一面の鱗雲の蔭に
月は姿を見せませんでしたけれども
道は明るく
鱗雲は蒼く光りました
二人の影がおぼろにおぼろに
白い土に落ちて並んで居ます

〔×を附す〕

四月

一日 sunday

七時に雨戸が開いたので、起きて直ぐ外に出た。前の道を右に真直ぐ歩いて行く。空気が澄んで、春には少し鋭い朝日がさして居る。若い桐苗がまだ芽もめぐまず、白い幹をあらはに光らせて立ち並んで居るところ、青々と広い麦畑の中に早く菜種の花が鮮かに咲いて居る処、晴らかな小川が、川底を綺麗に透かせて可愛らしいお喋りを続けて〔る脱カ〕居る処、今にもほころびようとする並木桜の若木が、美しい肉色に、幹から梢まで色ぐむで居る処を過ぎて、つきあたりの三叉路の辺まで行って見る。一番美しいのは併し、遠く僅かに霞んだ櫟林の一群の淡紅だった。純白に、また紅に桃も咲き出で、蓮翹の黄は明るく燃えて居る。

十時頃から、保ちゃん、文ちゃん、道ちゃんと、又「目黒御殿？」の方まで、ぶら／＼歩いて来る。昼食後、帰らうとする処へ兄が来たが、通ちゃんや澄ちゃんが教会に行くし、保ちゃんと一緒に其辺まで出ようと云ふので、そのまゝ帰る。祐天寺の方の道を行くと、そこ^{〔ママ〕}に木蓮の花がぎっしり咲いて居る。

二日

昨日は書くことが懶かった。で今、昨日のことを思ひ出しながらここまで書きかけたのだが、今日は又、昨日の気分からすっかり離れてしまっている。で僅かに目に見たことや、時間的な事実しか思ひ出す事が出来ない。昨日は家に帰^{〔るカ〕}□頃から風がひどく吹き出して、今も尚止みきらない。

三日

冷たい雨が朝のうちに止んだが、一日曇って、雪でも降さうに寒い。晩、中井氏が来る。

●序として（わがうたの）

私は自然に対しては、限らない憧憬を持って居ます。殆ど陳腐に見えるもの、凡々と思はれるものに対してすら、尚新しい驚異を覚えます。併しこれは又、私が結局、都会の子だからであるからかも知れません。そして、何うしても都会、又あらゆる文明の刺戟から全然身を逃れることが出来ないで居るからかも知れません。

私は檜の葉摺れ、砂岡の匂ひを限りなく懐しむと同時に、又あらゆる人為の技巧とも親んで居ます。それらが、私にはまるで闇と明るさのように、喜びと悲しみのように、^{〔設カ〕}建説と破壊のように、何処まで行っても厳然と対立的ではなく、錯雑した相関的の調和と不調和として、私の前に横はって居ます。只僅かに対立的、差別的な点を求むるなら、自然に対しては、驚異と「浸り度い」心持が先に立ち、人為に対しては、称讃と憎悪とが入り乱れます。これが表現さるるにあたっては、必然的に純自然に対しては、「あるがまゝ」を詠ひ、人為に対しては、極めて主感的な気分表白となり、時には冷たい心で吟味するような処まで行くこともあります。私は自分で自分のものを読んで見て、時に驚くことがあります。併し正しいか正しくないかと云ふことを越えて、やはりそれらは自分の現はれであることを認め、そして今では、それでいいと思って居ます。

四日

朝のうち用があつて、銀行と三越に行く。三越では、偶然アクション造形美術展览会¹⁷⁶⁾を見る――。

非常に面白く見た。同時に、これらは種々のことを考へさせる。これらは或る種の徹底を目指しては居ないか、而も伝統的空間・額縁との間に何故些の衝突もないのか、否中の少数のものをのぞいては、画面に対する屈従がありはしないか（自分は此の種のも

のを全々個人の個時の「気持」の現はれとしてののみ、其の最上の意義を認めるものである)。即ち、本質的表現と画面との妥協が見出されはしないか、何故に三角なる、又内容の徹底的援助の為に、内に盛られたる線、面、色に、更に必然的関連を持つ処の、極めて不規則なる四角乃至七角又弧状の赤い、又青い、或は全々斑な額縁を用ゐようとはしないか（茲に、このままなら、或る種の装飾的な意義への推移を認めざるを得ない）。ここで問題が二つになってくる。一つは理智的な、装飾的意義を多分に含むものとして、一つは感情的な純内的表白を主とするものとしてである。前者は、理智的である故に、装飾的意義の故に、額縁との間の妥協が容易に許される。併し、後者はより徹底的であり、感情的であり、本質的表現を目指す故に、当然前記の如き空間を要求する。そして、此の要求との唯一の妥協——正しい妥協としては、与へられたる空間を無視することである。例へば、四角な空間の上の半分と左の半分と下の四半分とが、全然白いまゝに残されることを恐れないことである。

自分は、今日展覧会では、エリザベス・ビュルデン女史の数枚の水彩が好きだった。これらや、吉邨二郎氏の或物、小さなペン画やデッサンは、純表現に近く、四角の中に居て、四角の支配から全く自由だから。

其他の大多數のものは、寧ろ装飾的な意義の上にのみ価値づけられる。^{〔泰〕}神原氏の諸作は、全然客体から離れようとする。これらは、徹底味に於て、ある純な^{〔ママ〕}をもつかもしれない。併し自分は、此の種の行方からは、最も貧弱なる感銘を受ける。何故なら此の種の行方としては、殆ど無制限に自由な音楽と云ふものを我々が持つからである。此の種の行き方は、寧ろ造形芸術の伝統を破らんとして、却って造形芸術の本質から離れて、自ら^{〔狭〕}狭小なる範囲の中に自縛したようなものである。

^{〔欄外に記す〕}〔即ち積極的に云ふならば、造形美術は当然視覚に訴へるものである。故に何処までか視覚的経験乃至衝動を基準とするものの方が直接的である。又、造形美術は、必然それ自身に Figure をもつ。そして、如何に主観化されたものとは云へ、自分等は全々視覚的経験を欠いて、Figure を生み出すことは出来ないから（勿論、我々は触覚によって、立体的な Figure を感ずることが出来るとは云へ、これは今の場合、本質的な問題とはなりえない）。]

尚是等の沢山のものを通して、ここにも既にあるマンネリズムが築かれつゝあるのは、悲しいことである。例へば、静物の見方などは、最も典型的になりつゝある¹⁷⁷⁾。

夕方から、皆で鎌倉に来る。梅子叔母様や子供達も来て居たし、後には昌生叔父様も来られて、賑かなにお酒がはづむ。^{〔ママ〕}

五日

朝から、いやーな風が、冷たい雨を一日絶えまなく送る。夜は祖父様〔柴山矢八〕が鹿児島に行かれるので、母と昌道をつれて大船までお見送りして、そのまゝ東京に帰って来る。

東京の夜は益々寒く、遅い東京駅前〔柴山矢八〕は、濡れ〜て、自動車が何台か行ったり来たりするが、そこに止って新しい客をのせようとするものは一つもない。やうやく二台の車で帰ると、曇った雲母を透してうっすらと見る外には、ほのかに白いものが光る。帰りついて見ると、門の中は氷が張ったように真白になって居る。熱いお茶をのんで床にもぐり込むと、再び烈しい風にまじって、雪霰が屋根を、樹々をはつはつと叩く音ばかりする。

六日

雪雨は、執念く降り続け、寒さも酷しい。
午後には、もうたまらなくいやーな気持ちに襲はれる。体温器は、三十八度三分まで昇る。煙草はまづい。で、食事もせずに、懷妊を抱いて床に就く。

七日

昨日までの雨が凍って、庭には高く霜柱が立つ。やがて、うららかな春の日は帰って来て、爽やかな気は四囲に満ちたが、僅か八度一分の熱は、決して下らうとはしない。一日床の中に居て、心ばかりあせて居る。

八日 sunday

只あまりに安らかな春日は
幸にも、早く東の間に見えず
風！風！
乾いた風は荒れる、荒れる！
黄塵は穹天に籠め
古籬は扉は縦に横に煽り
大樹は前に撓み後に揺れる！
おゝ、物の数にもない枝よ葉よ
枝は葉は一つの暗示の下に
只わけもなく互に入り乱れ
よろめき合ひ傷き合ふ

〔欄外に記す〕

〔我が嘆き、小さき過去に一点の涙を垂れ
我が怒りは飽き果てし不遇を捨て

我が望は奔馬に似て駆る
されど思ひ、風にのりて地を払ひ
心、土に生れ
黄塵となりて天を籠めなば……]

……

……

否！
彼方に黒き黒き、日暮の雲は動かず
見よ！彼方に力は尽き、力は生れる！

夜に入っては、雨を交へ、風嵐益々烈し

